

---

# 砂塵りのケーナ

由一

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

砂塵りのケーナ

### 【ZPDF】

Z0853V

### 【作者名】

由一

### 【あらすじ】

砂漠の国の少女ケーナと、一人の少年の出会いと別れの物語。

長編ファンタジー小説です。

ごく稀に挿絵あり。各章短めです。

## 少年は砂漠を行く

大きな皮帽子をかぶつたその少年は一人巻き起こる砂嵐の中を歩いていた。

ただ真っ直ぐ、目的の地へと向かう。少しでも方向を歪めれば、そこには死が待っている。

広大なクアマトラ砂漠は、人の命をこれまでにも数多く飲み込んできた。

昼の暑さは著しく水分を奪い、夜の寒さは体を凍えさせ永遠の眠りを誘う。

住まう魔物達は凶暴で人の肉を好む者もいる。

少年が一人で入るには、ここはあまりにも危険な場所だった。誰が見ても無謀他ならなかつた。手持ちは、沢山の水筒と中くらいのズタリユックだけである。

汗がポタポタとこぼれ落ちる。

眩暈がする、熱気で目の前が揺らめく。

あとどれくらいで到着するのだろう？

想像以上の距離だ。このままでは、干からびてミイラにでもなってしまうそうだ。

ここで野たれ死ぬなんてたまたもんじゃない。蜂に刺されて死ぬくらい嫌だ。

少年は、沸騰しそうな脳で思い考える。想像でもしていないとこの延々とループしているような光景に気をくるわせられかねなかつ

た。

見える物は、

砂 砂 砂 砂 砂

オアシス  
オアシス？

少年は目を輝かせ、そしてそれをこすった。幻ではない。  
退いた砂嵐から現れたのは、美しい大きな泉であった。

近づいても、蜃気楼のように消える事は無い。  
少年は嬉しさ余つて叫んだ。

「やつたぜ！ 本物のオアシスだ！」

スリーブ（収納袋）

オアシスでひと木みかぬ少年のヒロイシタケつておた者は……？

大きな湖の周囲は、この砂漠では珍しく植物が茂っている。

生えている大きなカヌキの木陰に、身に着けていた物を全て脱ぎ置きパンツ一丁の身軽になつた少年は、そこにある美しい青の水面にザブンと飛びこんだ。

この焼かれるような砂漠において、この小湖の水は冷たさを保っていた。

少年の体の熱を緩やかに奪い、至福の時を与えた。

「ふはー、幸せだあ。夢見たいだあ。」

声に出すほど少年は浮かれていた。去年の冬にコーサカルの温泉に入った時よりも、ずっとずっと気持ち良い。ずっとここにいたら最高だなあと思ったが、そもそもいかないのが残念だった。暫くしたら、また歩き出さねばならない。水から出した顔からふうとため息が漏れる。

ふと、木々の向こうの砂漠を見ると何やら動く者が見えた。

馬か何かに人が乗つていてる。しかも、こちらに向つてくるようだ。

少年は、慌てて岸に泳ぎ、着くとサッと服を着て向かってくる者を木陰から待ちかまえる。こんなところで、人に会うのは幸か不幸か。危険な者でないことを少年は願つた。

フードを被つたその人らしきものは、オアシスつくと馬から降りる。

そして、水面に近づくと着ていたそのフード付きのコートをバッ  
と脱ぎ去った。

少年は眼が良かった。遠目だったが、その身なりをよく見る事が  
出来た。

それだけに、見えるものがあまりにも刺激的すぎた。

「わわわわわわわわ！」

## 少女との出逢い（漫畫版）

少年は、オアシスに入らうとする少女を慌てて引きとめる。

## 少女との出会い

少年は声を上げた。

目の前で少女が服を脱ぐとするのを、またその後の状況を放つておけるほど少年は助兵衛では無かったのだ。それに、ここで声を出して制止しなければ、いざ話かける時に疑われてしまつのも不都合であった。

少年の出した声は、空色の美しい髪を生やすその少女に届く。

少女は「はつ！？」と声を出すと慌てて服を着直した。

「誰つ！？」

少女は、剣を携えていた。それを鞘から抜くと、ずんずんと湖沿いに少年に近づいてくる。

対して、少年は華奢で武器は持たずま丸腰だった。しかし、少年は逃げる事はしなかつた。逃げれば逆に怪しまれるからと言つものもあるが、話しかけようと思つていたから逃げなかつた。ただ、剣を持った少女が間近に近づくとやはりちょっと怖かつた。開いた両手を左右に振つて必死に説得に出る。

「わわわわわ！　僕は怪しいものじゃありません！」

「貴様、何者だ！？」少女は、少年を睨みつける。

「僕は、見習いの冥術師です。今修行の旅をしてるんです！　たまたま、オアシスに辿り着いて、それで……たまたま……たまたま

なんです！ 別に、敵意は無いです！ 本當です！ ひゃあー！

少女はそれを聞くと、剣を一筋ブンと空振りさせた後に鞘にさ始めた。

そして、さつきまでの険悪な顔とは打って変わつて可愛らしい笑顔を見せた。

「なんだ、やうこいつとか。まあ、あんな大声を出すあたり悪い奴じや無いとは思つてたけど。ふーん、冥術師の修行か。」

少年はホッと肩を撫でおるす。話の分かりそうな人でよかつたと思った。

「はい、この度は砂漠の国デルアラスにく律者の試練へを受けに行く途中なのです。」

「そつかノルマーダ神殿に行くんだね。君、運が良いね！ 私、あそここの国から来たんだ！ よかつたら馬に乗せてあげるよ。」

「ホントですかー？』

「うん、その荷物なら二人乗つても大丈夫だし。それに、君をこのまま砂漠に放つておくのは心配だからね！」

敵ではない事を知ると、少女は非常に親切だった。

少年は、丁寧におじぎをすると一緒に馬の停められている場所に向つた。



## 運命の砲隕（前書き）

少年と少女は互いの名を知る。  
運命の歯車は回りはじめる。

馬に乗る前に、少女は少年に名を尋ねる。  
少年は、顔を赤らめて照れくわそうに答えた。

「僕は、レイルって言います。生まれは遠く西のバリアルハン  
です。」

「へえ、随分と遠くの人なんだね。私は、ケーナって言うんだ  
！」

「ケーナさんですか……よろしくお願ひします。」

ケーナは、少年レイルのあまりにくそまじめな態度に思わず笑つ  
てしまつた。

かわいい奴だなと思った。だからちょいとからかいたくなる。

「別に、そんな丁寧に言わなくてもいいし。軽べくケーナって呼  
びなさいな。レ・イ・ル君！」

「は、はい！」

「ほら、試しに呼んでみなさいって。」

「え？ ええと、け、ケーナさ……」

「ちゃんといるの。ほこもつ一度ー！」

その時、ブルルンと馬が鳴いた。

そして蹄を乱雑に動かすと、ケーナはレイルをおちよぐのをやめた。

「ああ、『めん』『めん』！　あなたの紹介がまだだったね！」

「その馬は……サンダラップ？」

「へーっ、知ってるんだ！　この馬は背中に水を貯められるから、いつも砂漠を長々走つても大丈夫なんだよね。んで、この子の名前はガファルって言つんだ。おとなしくて優しい子なんだけど、ちょっとさびしがり屋なんだよ。だから今みたいに無視されると怒るわけ。」

ケーナがそう言つて脇腹を撫でると、ガファルはその通りですよと言つようになづらと鳴いた。

馬に殆ど乗つた事のないレイルは、このサンダラップに乗せてもらえる事に対し胸が高鳴った。

「これに乗せてもらえるんですか。それにしても大きいなあ。」

「そうでしょ？　そうでしょ？　そここれらの国の小さな馬よりずっと頼りになるんだから！　さて、私が前に乗るから、レイルは後ろに……そのへんに乗つて。」

「へ、うん。」

レイルは恐る恐る、馬に乗りにかかる。

想像以上に高く感じたが、ござ乗つてみると安定感があり気が落

ち着いた。

ケーナはレイルが乗るのを見届けると颯爽と足場を駆けのぼり、彼の前に飛び乗った。

「よし、じゃあ出発しようか！ オアシス入り損ねたけど。」

「は、はい！」

少年レイルとケーナはオアシスで運命の出会いをした。  
後々に巻き起こる、悲しい運命への旅が馬の嘶きと共に、今始ま  
つた。

## 砂漠の大団へ（前書き）

砂漠を疾走するサンドラブ。  
遂に王国への入り口が見えて来た。

## 砂漠の大国へ

^ . i 2 8 2 5 4 — 3 6 5 3 <

砂漠を走るサンドラブの走りは早い。吹き付ける風は暑さを和らげる。

少年レイルは乗っている間振り落とされないようケーナにしがみついていた。

女の子に触るのは初めてだつたから最初は少し戸惑つたが、しがみついたケーナのおなかは暖かくてやわらかなものだつた。そして、何だかとてもいい匂いがした。だから心ははいつしか落ち着き、こうしている事に心地よさすら感じた。

「もうすぐだよー もうすぐ街の外壁が見えてくるはずだから。  
ほら！」

ケーナが振り向いて言つた時には地平線の向こうに出て張つたものが見え始めた。

そしてそれがどんどん近づくにつれて大きく高くなつていいく。レイルはあそこが自分の目指していたところなのかと心躍つた。

クアマトラ砂漠に悠々と構える、3000年の歴史を持つ大国にして強国。

30万の砂漠の民が住み、リヒト＝ファアール王がそれを治める。

馬がその走る足を緩めたときレイルの前方には王国への入り口が口を開けていた。

中からは、人々の出す色々な音が流れてくる。

## 賑やかな街並み（前書き）

門の入つてすぐはデルアラスの商業地だった。  
賑やかな街並みを2人は通り過ぎて目的地の神殿へ向かう。

## 賑やかな街並み

馬に乗った2人が門をくぐると、そこには賑やかな街の風景が広がっていた。

爽やかな白煉瓦の建物が太陽に照らされてずらりと立ち並び、道端には様々な露店が軒を連ねている。

そして、人々が、馬が、猫が、和氣あいあいとあちらこちらを歩いてものを売り買いしていた。

「どう? なかなか良い街じゃない?」ケーナがレイルに振り返らずに聞く。

「うん、僕の住んでたと事は違うけど。すごい人だね! 何だかお祭りみたいだ。」

「ふーん、レイルの国は寂しいとこなんだね。この街ではこれが普通だよ。色んな国から色々な目的で人がやって来るからね! 許可さえ取れば誰でも路店をせるから、他の国から来た人が結構商売してるんだよ。」

馬は、悠々と人ごみを歩いて行く。辺りには食べ物か何かの良い匂いが混ざり合って漂っていた。

レイルは、何だかお腹がすいてきた。砂漠では殆ど何も口にしていなかったからだ。屋台で店員が燻した肉の塊をスライスしてお客様に売っているのを見ると思わず自分も買いたくなつたが、ここで馬から降りるのは大変だし、まずは目的地にたどり着いてからにしようと思った。

暫くして商業区を抜けると、人はまばらになつた。目の前に名も知らぬ木の並木が現れる。

ノルマーダ神殿は、その並木を過ぎてすぐ右に曲がったところへ  
あつた。

馬はそこで足を止める。

「はい、到着！」

ケーナはそう言つと先に馬を降り、続いてレイルが降りるのを手  
伝つた。

レイルは地に足が揃つとすぐにお辞儀をした。

「ありがとうございます。おかげで助かったよ。」

「どういたしました！」ケーナは腰に手を当てていった。

「じゃあ、せっかくだから祭司様のとここまでついて行ってあげる  
よ。レイルだけじゃ上手く話せるか心配だからね！」

「うん！」

2人は、丸い特徴的な物体が付いた屋根を持つその建物の扉を開  
け、中に入る。

中は薄暗く外と比べて格段に涼しかった。

## 英雄の像（前書き）

神殿に入った2人は中についた2体の彫像を見る。

## 英雄の像

中には、迎えるかのように二体の石像があった。

一体は冥術師の始祖である賢者ウガルティウス。

もう一体は、かつて魔神ヴェザイアスを倒した英雄アクロスを助けた聖女メルサイアだ。

2人ともこの世界で知らぬものは笑われると言つくらい有名な人物であった。

これらの彫像は、冥術関連の神殿に行けばどこにでもあるものだが、制作者は皆違うため顔や雰囲気は異なる事が多い。時にはものすごく面白く滑稽な顔をした彫像もあった。

「どう? ここの、ウガルティウスは良い出来でしょ?」

ケーナは、そういうつて威厳ある老人の像をポンポン叩く。  
ウガルティウスの像を触るのは冥術師にとってはやつてはいけないことだったが、レイルは止めなかつた。彫像の出来の良さに見とれていたのだ。

「すごいよ。今まで見た中で一番格好いいよ。誰が作ったの?」

「ああ、確かにこの国の彫刻家でアルミンドラつて人だつたかな? もう死んじやつたんだけど、人間国宝になつたんだよ。」

「へえ、すごいなあ。こんなに精密に人物を作れるなんて。僕には出来そうにないよ。」

「もー、レイルは弱気だね。やつてみてもいのに出来ないな  
んて決めつけちゃだめだよ。私は、興味引かれたらバンバン挑戦し  
ちゃうんだけどな。……あ！」

ケーナは足音に気付いた。

そして、その足音はすぐに人の姿を現す。

「……フムム、何か用かな？　おお、ケーナじゃないか！」

その皺多き老人は、冥術師特有の銀色の神官服と、帽子をかぶつ  
ていた。

眉毛は長く垂れて穏やかそうな表情を見せる。顎鬚も長く首の付  
け根くらいまであった。

## 冥司祭エドガルド（前書き）

レイルは、神殿の主である冥司祭に自己紹介をし、試練を受ける事を言ひ。

## 冥司祭エドガルド

「冥司祭様、久しぶりっ！ まだ、ピンピンしてて何よりだよ！」

ケーナは親しげに老人に話しかける。

冥司祭は、冥術師の中でも最上位の存在で、神殿の主を務める事が多かった。レイルは、老人が冥司祭としるべと慌てて深く頭を下げた。ケーナがこれほどの偉い人に軽々しく話しかけるのが信じられなかつた。

「ほう……この子はケーナの友達かね？ えらく砂塗れだが……」

「そう！ この子はレイルって言う名前で、さつき砂漠の中で友達になつたんだよ！ 冥術師の試練を受けに来たんだってさ。」

「ふむ。」老人は、レイルに近寄る。

「君は、一人で砂漠を越えて来たのかね？」

「は、はい。冥司祭の方にそれも試練だと言わされて、ウォーターボトルだけ貰つて……その……」

老人は眉を顰める。

「魔法水筒だけじゃと？ 普通の冥術師の修行ではそこまでの事はせんのじゃがな。大体何人か連れて来るものじゃ。して、レイルよ。おぬしの師はどういう名じや？」

「ええと、アファルガ冥司祭様です。」

「ほり、聞いた事はある。大国ファブリドの司祭じゃな……全く無理をやせるものじゃ。それで、メダロスはちゃんと持つてあるのか？」

メダロスは正方形の銀版で冥術師の免許の様なものである。右上には穴が開いており、各所の神殿で修業を積み試練を乗り越えた時、クレロスと言う銅板を貰いこの穴に輪を通して繋げられるようになっていた。このクレロスが10枚に達すると一人前の冥術師として認められるのだった。レイルは袋から、このメダロスを取りだして司祭に手渡した。

「ふむ、確かに。クレロスがまだついていない事は、試練はここが初めてのようじゃな。」

「はい、まだ他の試練は受けた事がありません。ここが、はじめてです。」

司祭は髪をさすった。

そして、ふおふおふおと笑った。

「ここ の試練を真っ先に受けようと大したものじゃよ。言い遅れたが、ワシの名はエドガルジヤ。レイルよここ の試練に挑もうと言つなら止めはせん。しかし、相当に甘くは無いぞい？」

「はいー」と、レイルはたじろぐ事なく答えた。



## ケーナの斡旋（前書き）

ケーナは、試練の間のレイルを住まわせてくれる処を探す役目を負う。

## ケーナの斡旋

「よしよし、では明日試練についての説明をしよう。今日はゆっくり休め。……と、言つてはみたのじやが、お主は寝床のあてはあるか？ 生憎じやが、この神殿は部屋が少なくてお主を住まわせる所が無いんじや。」

「つっぽりと旅に出されたレイルに、試練の間住ませてもううるうなあて等無かつた。」

しかし、彼には助け船がすぐ傍にいた。ケーナだ。

「そのことなら任せよ！ 私が何とかしたげる。多分、あそこなら大丈夫だと思うから。」

「ほう、流石はケーナじやな。よし、この少年の事お前に任せた。」

ケーナは、任せたと言つてえつへん胸を張つた。そしてすぐにレイルを引っ張つて、神殿の外に出ていき、再び馬にまたがると商業地の方へ再び走つた。目的は、食事である。

わかつていたとでも言つようにて、レイルが食べたいと思っていた屋台に向かい、スライスした肉片をケーナは買ってあげた。お金もケーナが払つた。他にも色々食べ物と、フルーツジュースを買って、建物の下にあつた腰かけに座る。

「ありがとう。これ、食べたかったんだ！」

「おおひ、よつぽどお腹空いてたんだね。良い返事だ！ その料理はドーネルスローフって言つんだ。この辺の名物だよ。」

空腹耐えきれず、レイルは肉を一切れつまむと口に入れる。 賑やかな肉汁と様々なスパイスから醸し出される旨みが新鮮かつ美味であった。

おもわず、顔がほころんでしまつた。

「レイルつたら、よつぽど美味しいんだねえ。見ているだけでわかるよ。」

「むぐむぐ。」

「あんま焦つて蒸し返さないようにな。 それで、レイルを泊めてくれる人の事なんだけど。」

「むぐ？」

「とつてもいい人だから安心していいよ。」

「むぐぐー。」

「あ、やつぱり喉に詰めらせたー。」

ケーナに背中をさすられて、もう少しで咳き込みそうだったところをレイルは何とか免れた。



砂漠の民の心意氣（前書き）

ケーナが親切してくれる理由を、レイルは尋ねる。

「けほつ、ありがとケーナ。色々とお話をなしあげつて……」

「いいんだよ、気にしないで。」

「ケーナ、どうしてこんなに親切にしてくれるの？」

ケーナはフルーツジュースをひとすくいするとふーっと息を出した。

「この国の心意氣ってやつかな？ テルアラスの民は、外から来た客人はみんなこの国にいる間幸せな思いをしてほしい。そして帰る時もこの国は良かったって思つてもらいたいって言つ気持ちがあるんだ。だからレイルにも、この国に来てよかつたと思つてほしいの。良い思い出を残してほしいのよ。」

「やうなんだ。確かに、この国って良い雰囲気だよね。賑やかで楽しげで……」「いつかまた会う、僕は好きだよ。」

「それはよかったです！ さういってくれると私も甲斐があるつても

んだ。さあ、この人形焼きも食べちゃつて！」

気を良くしたケーナは、自分の分の食べ物をどんどんレイルに与えたが、砂漠で何も食べていなかつたレイルの腹はそれを全て吸収した。食べ物をたらふく食べた2人は一呼吸すると、再び馬にまたがり商業地を後にし、居住地を北西に向つた。

辿り着いたのは、二階建ての一軒家だつた。

白壁と全体的に四角い作りはこの国特有のものだつたが点く明かりの燈す色はレイルに懐かしさを与えた。中からは香辛料のようなハーブのような匂いがした。ケーナはこの家の玄関に立つと、大きな声で聽きなれない言葉を放つた。すると、中から一人の女性が扉を開けて出て來た。褐色で黒髪の美人であつた。

「あら、ケーナ。こんな時間に何の用？」

「ファリーダ。悪いんだけどちょっと話聞いてくれる？」この子が、ちょっと訳ありで塩居候させてくれるとこを探してゐるんだけど。」

「ファリーダと呼ばれる女性は、そのないと答えるとケーナとレイルを家の中へと案内した。

## 『ホールの味（前書き）

フアリーダはレイルの師匠を承諾した。  
そして、洩れる過去の悲しい出来事。

## 「コーヒーの味

「へえ、冥術師の試練に挑むんだ。君、すごいねえ。」

ファーリーダは、コーヒーを白いカップに入れて、椅子に座ったレイルとケーナの前に置いた。

この国の独自製法で作られた「デルマリン」と書かれた前のコーヒーだとケーナがレイルに教えた。

レイルが一口それを啜ると、独特の酸味が口の中に染みわたった。食後には、最高の味だった。

「いいよ、面倒見てあげる。部屋もあいてるし、一人くらいなら十分大丈夫だよ。」

「ありがと、ファーリーダ。恩に着るよ。」

「気にしないで、この子がいた方がこっちとしても気が和みそうだからさ。妹のアーニャが死んでからずっと寂しい思いをしてたからね。」

レイルは、えつ？ と声を出した。

「ああ、レイルは知らないよね。ファリーダは妹と2人で暮らし  
てたんだけど、去年その妹さんが死んじゃってね……良い子だった  
よ。私とはどつても仲良しだったんだ。」

「やうなんだ……」レイルは、カップを持ちながら少し俯く。

「…………、気にしなくてもいいって。ファリーダももう立ち直  
つてるしさ。それより、居候させて貰えるんだから素直に喜びなよ。」

「

「うん。 フアリーダさん、ありがとうございます！ レイルと  
言います、よろしくお願ひします。」

レイルはが丁寧に頭を下げるが、ファリーダはまかせておいてと  
ばかりににっこりと笑つた。

友達（前書き）

ちょっと強引にケーナとレイルは晴れて友達になった。

「じゃあ、ケーナ。この子は私が預かるから、今日はもう帰つても良いよ。」

ファーリーダはそう言つたが、ケーナはすぐに帰る様子はなくまだ「一ヒーを囁いていた。  
まだ、帰る様子は無かつた。

「ちよつと待つでよ。まだ来てからそんなに時間経つてないんだし、もうちよつとお話をうつよ。」

「だーめ。あんたも一応門限あるんでしょ？ 明日以降にしなさいな。」

「ちえっ。ファーリーダって変なところダメだよね。わかつたよ、  
帰るつて。」

ケーナはしづしづ席を立つ。  
そしてレイルを見るとにかつと笑つた。

「んじゃ、明日また来るねレイル！　一人でまたあの神殿行けるか心配だからさ。」

「え？？」

「嫌なの？」

「そつに言つわけじゃないけど……なんだか悪いなって思つて。」

ケーナは、弱気な台詞を吐くレイルの方をポンと叩いた。そして、顔を近づけて言ひ。

「いいの。レイルと私は、もう友達だからさ！　今までの親切のお礼は私と友達になること。それで十分だよ。いいよね？」

レイルがいいよと頷くと、ケーナはじやあといつて颯爽と立ち去つて行つた。  
家中はちょっと寂しくなつた。

## フアリーダの腕まくつ（繪書モ）

レイルは、フアリーダにも茶化される。

## ファリーダの腕まくり

「あの子、珍しく粘ろうとしたね。いつもならサクッと帰るんだけど。」

ファリーダは椅子にどあんと座つた。

胸の部分が波打つ。ナイスバストなのが克明であったが、くそ真面目なレイルはそれには興味を示さなかつた。

「よつぼど、あんたが気に入ったのかもね。男に興味なつしんぐのケーナに気に入られるなんて中々大したものじやないか、レイル。」

「

「は、はあ……」

レイルは、顔が真っ赤になつた。

褒められると、すぐに照れるタイプだつた。

そんな彼を、ファリーダは頬杖を付いて見る。そして、あまりの純朴さに笑みがこぼれた。

「ハハッ！ もつと自分に自信持ちなつて。途中までは一人で砂漠越えて来たんだろ？ 並の人間が出来る事じやないんだからさ。それに、結構美少年じやないの……下手すりや女の子にすら見える

「うらうだよ。」

「は、はあ……」

「じりや、楽しくなりそうだな～作る料理は倍になるけど、逆に練習にもなりそうだし。レイル、明日から『じ飯』は任せといてよ腕をふるつて最高の『じ飯』を作つてあげるからさ。」

そういうて、腕まくりをするファリーダにレイルは安心感を得た。ケーナ同様、信用できそうな人だと思った。

ただ、まだ彼女とケーナの2人の事を深く聞く事はやめておいた。おいおい、ゆっくりと聞いて行くことにした。

## 友の記憶（前書き）

久々にベッドで眠れると、レイルは喜ぶ。

レイルが案内された部屋は、よく片付いたこぎれいな部屋で。南側に大きな窓があった。

とても居心地のよさそつた部屋だった。

ファーリーダが、また明日と階段を下りていくと、レイルは真っ先にベッドに身をうずめた。こんなふかふかのベッドで寝るのは久しぶりだったので心躍った。

「この家に居候できるなんて本当にラッキーだ。

食べ物も作ってくれるみたいだし、小ぶりだがお風呂もあって、さつき砂漠でたまつた砂埃と汗を一気に流す事が出来た。ケーナには本当に感謝しなくては。

レイルはあおむけになると、ふうっと息をする。

長旅で本当に疲れていたため、あつという間に眠気がやつてくる。今日はもう寝てしまおうと彼は思った。明日から試練は始まりを迎えるからだ。

ゆっくりと目を閉じ、故郷の事を思い出す。  
良じ思い出はそうはない、故郷の風景を。

友人の顔が、ふと脳裏によぎつた。カインと云う金髪の少年だった。

良く笑う元気な子で、色々とおせつかいだったが人柄のよい人間だった。

レイルは一緒に色んなイタズラをしでかしたものだった。もつとも、ただレイルはほとんどカインに引っ張られていただけだったし、イタズラされる側になることも多かつたのだが、今となつては、良い思い出だった。

しかし、そのカインとはもう何年も会つていなかつた。レイルのよつに厳しい旅に出て、そのまま行方知らずになつていた。

カインは今どうしているのだろう?  
生きているのだろうか?

そう考へてゐるうちに、レイルは夢の世界に誘われた。

## 城がわが家（前書き）

朝の新聞に、デルアラス城に侵入者が出了との記述。それに関連してケーナの素性が少し明らかになる。

翌朝、レイルが朝食を取つてゐる時にケーナは早々とやつてきた。そして、机に座るとファリーダにコーヒーを催促した。

しかし、ファリーダはすぐにコーヒーを入れようとはせず、代わりに地方新聞をケーナの前に差し出した。ケーナがのぞきこむと、そこにはこう書いてあつた。

「国の中にあるデルアラス城に昨日、何者が侵入した！　門番4人が襲われ、氣絶させられたが命に別条はない。犯人の行方は今のこところ不明、物色された物が無いか、まだ城内に犯人が残つていなか等現在城内総出で調査中である」

ファリーダは、その新聞に手をついてケーナに目を向けた。向けた方も、向けられた方も真剣な顔だった。

「大丈夫なのかしらね？　犯人がまだわかっていないなんて、ケーナも不安でしょ。」

「まあね、こいつのは困るよ。行動も制限されかねないし、命の危険だつてあるからさ。何せ、屈強な兵士4人を手玉に取つたんだ……スペイか野盗か知らないけどただ者じやない。ただ、私が見つけた時は何とかしてみせるつもり。」

「へえ、自信家だねえ。確かにあんたは昔からじやじや馬で剣の腕は長けてる。でも、相手は何をしてくるか分からぬからね……」

ところで、レイルは話についてないみたいだけだ。

レイルは、試練が始まる事に胸が高鳴っていたため、この事件についてには反応薄だった。

ただ、ケーナの素性は気になっていたし、城に住んでいるという事実には興味も抱いたので聞いてみる事にした。」

「ケーナって、城に住んでるの？」

ケーナはまあねと、さっぱりした口調で答えた。

ただ、それ以上は語らなかつた。代わりにファリーダが話し始める。

「驚いた？　この子、結構いいとこの出なんだ。所謂、おひめさまつてやつよ。あんまり他の奴には知られちゃなんないんだけど、レイルになら大丈夫だよね？　口外しそうにないから。」

レイルは、とりあえずうんうんと頷いた。

ケーナもなぞるようにうんと頷いて、にかつと笑つた。

「そうだね、レイルなら大丈夫か……そうなんだ、一応この私は由緒ある家の出なのよ。こうやって外を出歩くのはあんまり良くないんだけど、城の中つて退屈だし世間知らずになっちゃうし運動不足になるから、いつも抜け出してるの。一応決められた門限には戻つてるから、今のところ怒られる事は無いよ。」

「そりなんだ。ケーナってお偉いさんなんだね。」

「一応はね。でも、遠慮する事は無いよ。私達は友達なんだからね。」

ケーナはレイルに向けてウインクをした。  
そして、ファリーダが入れたモーニングコーヒーをぐいっと飲む。

## 試練のはじまり（前書き）

冥司祭エドガルドがレイルに与える最初の試練とは？

## 試練のはじまり

それから、暫くしてケーナとレイルは神殿に向つた。

砂漠の朝は意外と涼しいが、太陽の熱は容赦なく馬に乗つた2人に降り注いだ。

立ち並ぶ建物は白く輝いて眩しいけれど美しくもあつた。

神殿に着くと、その外の様子とは裏腹に朝っぱらから中部は薄暗かつた。

英雄の2体の像は、今日も凜々しく立つて何も語らない。

「おお、遅かったな！ もういいと早う来いな。砂漠の民は10分前行動が肝じやからな。」

「すいません……」

朝から元気な冥司祭エドガルドは、本氣でレイルを叱つたわけでは無かつたが彼は真に受けた。

ケーナはそれを見て、まああと場をなだめる。

「今日は、私がもたもたしちゃつたから遅くなっちゃつたんですね

よ。悪いのはレイルじゃありません。」

「ふむふむ、わうか……ケーナも時間には氣をつけんじやぞ。ワシなんぞはそう怒らんが、ファアール王とかドルマン兵士長はもうこいつのことんと厳しいからな。早めの行動が肝じや。」

「はい、冥司祭様々。肝に銘じておきます。」

「わかつたらよ。……では、レイルよ、早速だが最初の試練をお前に伝えよ。心して聞けよ?」

レイルは、緊張した面持ちではいと答えた。

それを見て、エドガルドは口に皺を寄せつつ広げる。笑っているよつにも見えた。

「よし、では言おう。最初だからまあ、比較的簡単なものじや。……」Jのデルアラスから西に進むとファブラリタイと呼ばれる遺跡がある。そこには長い長い地下道があるんじやが、その最深部には巨大な白蛇が住んでおつて、年に数度真珠の様な美しい球を生む。レイルよ、ひとつで良いからその球を取つてくるのじや!」

ケーナとレイルはそれを聞いて驚いた顔を見せた。  
2人にとってそれは簡単なものには思えなかつたのだ。



## 握手（前書き）

難関を思わせる試練にケーナはエドガルドに詰め寄る。エドガルドはレイルに間接的にヒントを与える。

ケーナはエドガルドに詰め寄る。

「ちょっと！ あの白蛇のところにレイルを一人で行かせるんですか？」

「左様じや。」老司祭エドガルドはゆっくりと頷く。「皆、この試練は必ず行つておる。レイルにやつてもうつのは当然の事じや。」

「しかし、あの白蛇は人を食べるつて聞いた事があるんですけど。かつて何人かはぐくりと丸飲みにされたらしいじやないですか？」

レイルはギョッとした。

どうやら想像どおりに危険な内容のようだ。しかし、断る事はできなかつた。

だから、心配するケーナの手に触れて止めに入る。

「ケーナ、いいんだ。これは試練なんだから。」

「だけど……」

「大丈夫だよ、何とかやつてみるから。」

「うん、わかつたよ。レイルがそうするなら止めはしない。……でも。」

ケーナは再び、エドガルドの方に振りかえる。

「司祭様！ 私も、レイルに同行していいですか？ 今の話だと、一人で行かなければならぬとはいっていませんでしたから。」

老司祭エドガルドは、気付いたかと言ひつつに髪をさするとにんまりと笑った。

「ムフ、それは構わん。この試練には、人の手を借りてはいけないと言う条件は無いからのお。どれだけの人間の力を借りられるかと言つ社交性を試す意味もこの試練にはあるんじゃからな。」

「なんだ。」ケーナはレイルの方を嬉しそうに振り向く。

「よかつたね！ 私がいれば、この試練は難なくこなせるはずだよ。剣の腕だってばっちりだから。」

「すごい自信だね。」

「ホントだもん。もしもの時は任せなさい。」

レイルはケーナを頼もしく思った。  
エドガルドの前で、若き2人は改めて握手をする。  
ケーナの手は柔らかくて暖かだった。

## 白蛇の恋（前書き）

ケーナとレイルは白蛇に纏わる情報を集め始めた。

## 白蛇の伝説

神殿を出ると、ケーナはレイルのある場所に連れて行った。考古学者のノエリーという女性の家だった。

金髪ポニーテールで銀縁メガネをかけたその顔に、綿織の白いローブが良く似合つ。

ファーリーダも美人だったがノエリーもまた聰明な美しさがあった。

「なるほど、あの白蛇の生み出す珠く蛇真珠くを取つてくるんだ。そりゃあ大変だねえ。しかも、殺しちゃダメってか。この子一人じや出来そうにないわ。」

「そうでしょう？だから、この辺の事に関して詳しいノエリーなら良い事教えてくれると思つたんだよ。」

「まあ、それは贅沢だと思つよ。あの蛇の事も研究してるしねえ……まあ、300年くらい生きてるんだから正確には蛇じゃないんだけどさ。」

「せつかくだから詳しく教えてよ、ノエリー」

「いいよ。」

そう言つと、ノエリーは腕組みをしてケーナ達に背を向けた。  
そしてこの地域に伝わる伝説を語り出す。

かつて、このデルアラスに大いなる災いが起こつた。

水源である、オアシスの水がほとんど枯れてしまったのだ。

人々は飢えと砂漠の暑さに耐えられず、次々と死んでいった。  
このままでは、砂漠の民は全滅してしまう。

当時の冥司祭オルドレアは、王の命を受けファブラリタイ神殿で  
降雨の儀式を行つた。

その時に現れたのが今いる白蛇だと言つ。

蛇は、オルドレアを丸飲みにした。

しかし、その後に見返りとして砂漠の地下に水を溢れさせ国は救  
われた。

現在のデルアラスの繁栄も、この白蛇によつてもたらされている  
と言つ。

凶暴で人を食ひこの蛇を殺さないのはそのためである。

神の使いである白蛇を殺せば、水はたちどころに失せ、デルアラ  
スは滅亡するだろう。

もつとも、この大蛇を倒せるものは無きに等しいが。



## 白蛇の弱點（前書き）

ケーナはノエリーに白蛇の対処法を聞くが……

「……そんな感じで、あの白蛇はずっとあの神殿に巢食つてゐるわけ。冥術師の試練の内容に入つてるのは、オルドレア冥司祭が関わつてゐるからだろうね。あの白蛇が「蛇真珠」を生み出すようになつたのはオルドレアを飲み込んでからの事だから。あの美しい珠にはその冥司祭様の冥の力が込められているって話だし、持つていると何らかのご利益があるのかもねえ。」

「ふーん、私も少しばかり聞いた事があるけど。改めて聞くとどんなもしない白蛇なんだね。」

「そうだよ、あれは神話の生き物レベルだもん。大黒龍ヴァシバンや巨人ガニビオスに匹敵するよ。ちなみに、あの白蛇の名は正確にはレインザードと言います。」

自分の知識を語る時のノエリーはとても嬉しそうだつた。調べることも楽しいが、他人に話す事もまた彼女にとつては楽しみの一つなのだ。他人と接する機会はそう多くないので、こうやって2人もお客様が来たのは久しぶりでノエリーにとつては吉日だつた。だから、ケーナの質問にも快く答える。

「それで、そのレインザードが襲つてこない方法つてあるの？普通に近づくと襲つてくるんでしょ？」

「らしいね。ただ、今まで冥術師達はその試練を乗り越えてきたわけだから、あるんだよね方法が。」

「ノエリーは知らないの？」

「実は、知つてまーす！」

「何だ、知つてるんだつたら教えてよ。」

「簡単だよ、人間が一人食べられた後はレインザードは暫く襲つてこない。ああみえて小食らしくてねー数分間おとなしくなるよ。」

「えつ……ちょ、ちょつと…ノエリー、〔冗談はやめてくれない？」

「〔冗談でもないよ。試練を受ける冥術師達は、盗賊なんかをそそのかして神殿に連れて行きレインザードの生贊にして珠を取つてくるつて言つてたもん。」

レイルの顔がサーツと青ざめたのがケーナには見えた。



## 続白蛇の弱点（前書き）

ノエリーは、白蛇の攻略法を知っているのだが勿体ぶる。

## 続白蛇の弱点

「あらあら、その少年はビビッちゃってるじゃん！」

「当たり前でしょ？ 他人を生贊なんて私達にはできないよ。」

ノエリーは、面白がって笑った。

他人が驚いたり、怖がったりする姿を見るのも彼女は好きだった。だから、ワザと怖がらせるような事も良く言つ。ホラー話も得意だった。

「まあ、そうでしょうねえ。言つとくけど、今の話はあくまでもウワサだから。他の冥術師だって他人を犠牲にするのは嫌に決まってるし〜」

「つてことは、他にも方法があるってこと？」

「うん、私も知ってるよ。」

「ちよ……それなら、最初から言つてくれればいいじゃん！ 何でわざわざ、遠まわしにするのよー？」

ケーナが怒るのも、ノエリーにしてみれば面白かった。喜怒哀楽が素直な人間の表情と言つものは魅力的だつたのだ。だから、ノエリーはケーナの事が好きだつた。

「いや～ちょっとからかつてみたかったのよ！　どう？　なかなかドキッとしたでしょ。」

「もー、ノエリーの意地悪。ほひ、さつあと白蛇の弱点を教えてよー。」

「はいはい、わかりましたー。よーく耳かつぽじつて聞きなさいよ。」

ノエリーはこほんと息をする。  
レイルと、ケーナはまじまじと彼女を見つめた。

「わっか、白蛇レインザードは人を食べるとおとなしくなるって言つたよね？　覚えているかい、レイル少年。」

「は、はい。今聞いたばかりなので。」

「よろしい。そう、レインザードはさつきも言つたように人喰い蛇なの。だけど、あの蛇は人を食べなくても生きられるんだ。昔、神殿が固く封じられて人が入る事が出来なくてレインザードはずっと生き延びてた。じゃあ、何で人を食べると思う?」

「え、ええと……わかりません。」

「おいしいからよ。人の持つ生命の力がとつても好物なの。つまり……わかるかしら?」

「え、ええと……どうこう」とですか?」

「人の生命の力さえあれば、肉体は無くても良いってことなのよ。」

「え、ええと……それは一体……」

ノエリーはにやりと笑う。



続々・白蛇の弱点（前書き）

人間の生命の力と類似する力を持つものについて考古学者ノエリ  
ーは話す。

八二九四九〇—三六五三八

「要は、人間を作ればいいってわけ！」

「ええっ！？」ケーナは困惑の表情を浮かべる。  
「そんなこと、出来るとは思えないけど。」

「できるわよ。」ノエリーの言い方は自慢げだ。  
「偽物の人間ならね。人間の生命力と近似したエネルギーを持つ  
物体を作ればレインザードはそれを食べて満足するはうよ。」

「それは一体、似てる物つて何よ？」

「あるんだなー、人間そつくりなエネルギーを持つ植物が。〈百  
年草〉って言うんだけど、砂漠のとあるオアシスに生えてるんだっ  
て。」

「へえ！ それじゃあ、そのオアシスに行けばいいんだね？ よ  
かつた、安全な方法があつて。」

「どうかなあ……そう簡単に行くかなあ？」

「え？」

「そのオアシスつて、〈竜巻地帯〉の中にあるんだよね。ケーナ  
も知ってるでしょ？ あそこが危険なところだつて。」

ケーナは頷いた。

「竜巻地帯」はこの砂漠では魔の領域で、今まで多くの命が奪われてきた。年中不安定な気候が続き、巨大な竜巻が非常によく巻き起こる。テルアラスの人々の多くが「行くな、行く位ならあきらめる」と言つ場所だった。

「あんなところに……弱ったね。」

「正直、あきらめたらどう? もうこの少年もやつをからずつとオドオドしてゐるし、ケーナには死んでほしくないしや。」

「そうはいかないよ……レイルだって……そうでしょ?」

レイルは、オドオドしながらも頷いた。  
それを見ると、ノエリーはふふんと鼻を鳴らした。

「そつか……じゃあ、やつてみなよ。その代わり、準備は周到にね!」

「わかってる。」ケーナは胸をポンと叩いた。

「あ、そうだ。あそこに行くんなら、あの人のところに尋ねてみると良いかもね~」

「あの人って?」

「ああ、ちよいと酒臭くて変なおっさんだけ悪い人じゃないよ。名前は……」



## 砂漠をまたぐ男（前書き）

「竜巻地帯」の情報を得るために、ノエリーの紹介した男のもとへ向かひ。

## 砂漠をまたぐ男

その家は、デルアラスの北東の端にあった。

この地域は、職人たちの集う地域で、漂う空気は鉄の匂いがする。歩く者達の多くは、非常に屈強な肉体を持つており、ドンドンドンと音をたてるよう立堂々と歩く姿は勇敢であった。

木製の扉が開くと、独特のふわついた匂いが漂ってくる。2人はあまり嗅いだ事が無かつたので分からなかつたが酒の匂いだつた。そんな中から顔を出した男はさながらドワーフ族のようで、背はそれほど高くないのだが、筋肉隆々で蚊も刺さないような硬さを感じさせた。

「うむ？ お前らは何者だ？」

「あなたが、ガドスさんですか？」

ケーナの問いに、男は頷く。

この男こそが、砂漠の事についてならこの近辺で右に出るものはないといいとすら言われる「砂漠またぎのガドス」であった。

「ガドスさん、教えてほしい事があるんです。△竜巻地帯△につ

いて詳しいと聞いたので……」「……

「なぬ!? まさかお主ら、あそこに行くつもりでは無からうな  
?」

険しい顔でガドスは、レイルを睨みつけた。

レイルは、怯んで目を一瞬そむけたが何とかガドスの方を向きな  
おして重い口を開く。

「そ、そのまさかです。僕が、冥術師の試練を乗り越えるために  
行かなくてはならなくて、その地帯の中にあるオアシスに行く必要  
があるんです!」

「なるほどな。」ガドスは自分の口に生え茂った鬚を撫でる。

「まあ、中に入れ。詳しい事を聞かせて貰おう。」

## 小汚い部屋で（前書き）

ガドスの家の中はとつても酒臭くて散らかっていた。  
レイルは、「竜巻地帯」への事を聞くが……

## 小汚い部屋で

ガドスの中は散らかっていた。

あちらこちらに新聞紙や怪しげな本が点在しており、酒の入っているのかないのか分からぬ瓶が卓上に並んでいた。食べかけの皿も現れずにそのままになっている。ノエリーが氣まずそうに言つたのも無理は無いくらいに、がさつな雰囲気が部屋全体を漂っていた。

ガドスは、ケーナとレイルに部屋の奥にあつた謎の食べ物を渡してきた。

干からびた何かの肉らしきものだつたが、何だかこの環境で渡されると不安を感じさせる。

「うめえぞ、食え。」

「は、はい……」

レイルは、恐る恐る肉をひとちぎりすると震える手で口に運ぶ。死にやしないかと不安になつたが、断る事も出来なかつた。

がじつ

肉を、歯で挟む。

舌の奥に染みわたらるものは、想像を絶するものだつた。レイルは思わず顔の筋肉がゆるむ。

ケーナも思わず、おいしい！ と口に出した。

「どうだ、美味しいだろ？ ペサート牛のジャーキーは絶品だぜ。」

ケーナもレイルも大きくうなづく。

「酒のつまみには最高なんだよな。肉汁と胡椒の絶妙なコンビネーションがたまらねえのよ。デルアラスでもそう出回っていない貴重なモンさ。」

「ありがとうございます。そんなものをわざわざ僕達にくれるなんて。」

男は、ガハハと笑った。

「おお、礼は良いぞ少年！ 僕も金に関しては困つてないからな。お前らみたいにく竜巻地帯へに用があるやつも多いから、結構良い金になるんだ。」

「えつ？」

「なーに、金さえ払ってくれりゃあ俺がそのオアシスだつて行つてくるさ。あそこもよく、冥術師の輩が頼みに来たし採つてくるものも分かる。例の草だろ？ 人と似たエネルギーを持つてるって言ひ……」

「はい！ それで……いくら払えば採つてきて貰えるんでしょうか？」

「か？」

男はタバコを一本口にくわえてライターで火を付けた。

そしてふーっと白煙をレイル達に吹きかけたので、少年少女は咳

き込んだ。

「まあ、相場で150000円といいだな。」

## 高額のやつ口（前書き）

ガドスはオアシスに行ってくれるようだが、その依頼金が非常に高額だった。

## 高額のやり口

「1500000ララですか？」

「いや、150000ペラールだ。」

「え、えつ！？」

レイルが驚くのも無理は無い。

世界通貨は10ミラで1ペラールである。デルアラスの一般人の平均月収は50000ペラールなのを考えれば、この依頼金が相当な高額である事が分かる。対して、レイルの持ち金は50ペラールくらいしかなかった。

「そんなに、高いんですか？ 僕には到底払えません……」

「そりゃうなあ、少年に払える額じゃねえよ。どうじてもあの草が欲しいんなら、竜巻地帯に行くしか無いわなあ。」

「それじゃあ、一体どうやってその場所を……」

レイルがそう言おうとした時、ケーナが前に出て来た。  
そして凜々しい目でガドスを見る。

「おっさん、大丈夫だ！ 私が払うよ！」

「ケーナ！？」 レイルは驚いて目を丸くした。

「任せときな、レイル。これも縁つてもんだからね、何とか正面するよ。」

ガドスもまた、目を丸くした。  
そして、にやりと笑う。

「お嬢ちゃん、それは本当だらうな？ 無理行つてないよな。」

「本当だよ、何なら明日にでも持つて来てやるうか！？」

「ほー、そりや楽しみだな！ 少年、これはまた良い友達を持つたな。」

レイルは茫然としていた。

そして、そのままケーナに連れられて家を後にした。

砂漠の夕日（前書き）

一仕事終わり、商業地で一服するケーナとレイル。

## 砂漠の夕日

「本当に大丈夫なの？ あんなこと言つて。」

商業地区で、美味しいジュースを飲みながらレイルが心配するしかし、ケーナは全然平氣そつた顔だつた。

> i 2 9 7 9 0 — 3 6 5 3 <

「大丈夫だつて！ 私もそれなりの家の間だからさ。それくらいなんとこしてみせるよ。」

「でも、やつぱり悪いよ……僕、何にもお礼なんて出来そうにないし……」

「いいんだよ、乗りかかつた船だしね。それに、レイル一人じゃこの試練何とか出来そうにないもん。せつかく友達になれたのに死んじやつたりしたら嫌だしさ。」

「だけど。」

「素直に、」厚意に甘んじなさいな。明日、あのガドスのおつち  
やんが驚く顔を2人で見よつよー。」

「ケーナ……わつづー？」

急にケーナが寄りかかってきたので、レイルは赤くなつた。首元  
に、彼女の綺麗な髪が触れる。脈拍は上昇しバクバク音を立てた。  
しかし、その音はケーナには聞こえていないのか、体を離す様子は  
無くニコニコと笑つていた。

「楽しみだね、これから。」

「う、うそ……」

レイルは、照れ隠しのように遠くの空を見る。  
夕暮れの商業地は暖かい橙色の光で照らされていた。  
今日は忙しく歩きまわつて過ごした。新しい出会いがつた。  
そんな一日も、もうすぐ夜を迎えるとしていた。

庶民の料理（前書き）

レイルとフードワーダは夕食を取る。

「へえ、色々あつたんだねえ。」

熱々の焼き鳥を食卓に置いてファリーダはレイルに話しかけた。腕によりをかけて作つたのか、なかなか豪華な内容の料理だった。

「はい。でも、全部ケーナがやつてくれた感じで……何だか申し訳ないです。」

「気にする事は無いよ！　あの子は、そういう性格なんだし。レイルも、自分の巡りあわせがよかつたって思つていいと思うよ。運も実力の「つけ」で言つてしまふ？」

「そうだけど……」

もじかしい仕草を取るレイルに、ファリーダはさつやと食事をいただこうと促した。

人数分以上ありそうな料理を、2人で食べる。どの料理も味は中々の物で、家庭的な温かみの様なものを感じさせた。

「どうづく。私の「はんぱ。おいしい？」

「はい！　上手だね、ファリーダは。」

「そういうてくれると嬉しいなー、作った甲斐があるつてもんだ。ケーナの奴も、わざわざウチに食べにくるくらいだからねえ。」

あの子は、自分のトコにもつと美味しいもんがあつそつなもんだけ  
ど。」

確かに。と、レイルは思った。

あんな大金を一日で工面できるほどるものなら、毎日高級な料理  
を食べてもおかしくない。

その割に、商業区のジャンクフードや庶民の料理が好きなのはち  
ょつと不思議だ。

「しっかりケーナも……」

野菜を食べながらファーリーダは何かを言おつとしたが、何故か言  
葉を詰まらせた。

レイルが不思議そうに覗き込むと、彼女は別に大したことじやな  
いと」ました。

持つてる女（前書き）

翌日、ケーナは言葉通り……

## 持つてる女

翌日の朝、ケーナは革製の袋を持ってレイルのもとにやってきた。レイルが、袋の中を覗かせて貰うと金貨や銀貨がタンマリと入っていた。すごい家の者である事は分かっていても、一日で持つてこられると驚きは隠せなかつた。

驚いたのはレイルだけでは無い、要求したガドスもだつた。彼の自宅でそれを見た瞬間に、「冗談だらうと言葉が漏れた。

「へへへ、お譲ちゃんただ者じやねえな。」

「まあね、ちょっと面倒だつたけど。」

「わかつたよ、採つてきてやる！ 貰つもん貰つたんだ、く砂漠さくまのガドスガドス」の前におこして必ず期待に応えてやるよー。」

ガドスはそういつて、革袋を持つたまま自分の胸を叩いた。ジャラジャラと貰幣の音が響く。

それから、3日経つた。

ケーナとレイルはその間、デルアラスを観光がてら見て回っていた。この日は、国立図書館に来た。3階建てのその建物には、古書から新書まで様々な本が眠っている。2人は一緒にその内部を探索して良い本が無いか探していた。

「すげーな、こんなに大きい図書館は見たこと無いよ。」

「そりゃんだ。私は、ここよく来るからこんなものなのかなーって感じだけど、やっぱり大きいんだね。そういえば、ここ地下には伝説の書物があるらしいよ。」

「伝説の書物？ もしかして禁経本とか？」

「あるかもね。レイルも禁経使ってみたいの？」

「それは……」

禁経とは、人々の間では究極と言われる冥術の事で、とてもない効果や威力を持つものを言う。レイルもいくつかは聞いた事があった。しかし、そのリスクについても多く聞かされて来ていた。

禁経は、国を滅ぼす事もあると。



## 禁経のもたりあもの（前書き）

レイルとケーナは禁じられた眞経（魔術のようなもの）の話をす  
る。

## 禁経のもたらすもの

「僕、ある国が異次元に飛ばされたって昔聞いたことがあるよ。その国があつた場所が有名なくカリュテの穴へなんだって。」

「へえ、あの底なしと言われる大穴か。一度見て見たいと思ってるんだよね！ 私もそう言う話を知ってるよー。実はね、この砂漠も禁呪によるものだつて噂があるんだ。」

「そりなの？」

「遙か昔は、このあたりは緑豊かな土地だつたんだつてさ。だけど……ある大きな戦があつて、その時に禁経を使つたら今の様な気候が続くようになつて大地の表面は枯れて砂漠化が進んだそうだよ。」

「

レイルは、興味深そうにうんうん頷いた。

「あのく竜巻地帯も、禁経のものだつて説がある。確かにあれだけ竜巻が起こり易いのは不思議だからね。大きな力が働いてるとしか思えない。けど、禁経が生み出したのは悪い事ばかりでもないよね！ デルアラスと言つ国とその文化もこの砂漠の賜物とも言え

るし、「五年草へも生えるよつになつたし。レイルとも出合えたし。

」

「そつなかな？ 禁経のおかげで今いひしていのかな？」

「否[定]じゃなこと思ひばら。何にしら、禁経のもたらす影響は大きいつとよ。じやあ、そろそろファコーダのトコに戻らうか。」

」

「そうだね。」には、また口を改めて来よつと思ひ。」

2人は、長い螺旋状の階段を降りて太陽の下に出た。  
太陽は、ほぼ天の中心にあつた。

## 変なねつねん（前書き）

ケーナ達は、フアリーダのところに来る。  
すると……

## 変なおじさん

ファーリー・ダの家に戻り、ケーナが扉を開けると「ガハハ」と喜び声が聞こえた。

聞き覚えのある声だ。

「よお、3日ぶりだな！」

「ガドスさん！」レイルは手を丸くする。

「どうしてここに？」

ガドスは、手に持った布袋をシャカシャカと振った。中に入ってる物は想像できた。

「ちやーんと、探ってきてやつたぜ。これが『百年草』だ。」

そう言つと、レイルに向けて投げて來たので慌ててキャッチした。独特の匂いが袋から漂つ。

「早かつたですね！」

「あたまつよー。慣れたもんだからなーあそこに行くのは。一応

住所も聞いてたから探ってきたついでに持つて来てやつたんだよ。  
そこのねーちゃんには随分怪しまれたけどなあ。」

そう言つと、ガドルはファリーダの方を見た。  
彼女はふんと息を荒げた。

「まつたく、びっくりしたわよー。」の変なおじさんったら、あ  
んまりにも強く口を叩くんだもん。変な人じゃないか不安になつた  
んだから。」

「ハハハ、すまねえ！ つい、強く叩いちまうんだよ。近所のボ  
ル爺さんが耳が遠いからいつもドンドン叩きまくつてるんでね。」

「はあ……」

「そんで、レイルにケーナよお。その百年草は、レインザードに  
使つんだよなあ？」

ケーナは頷く。

「そうだよ。あれ、この前言つたっけ？」

「今までにもいたからさ。冥術師の依頼人かな。だから、言つて  
おぐが、そのまま草をばら撒いてもレインザードは引き付けられん

「 ぞ。

「 じゃあ、さうするのね。」

「 それはだな…… 加工してもいいんだ。 もう準備したボルティン  
になー。」

## 変なじこわん（前書き）

レイルは、ガドスの情報でボル爺さんの元へ行く事に。

## 変なじいさん

レイル達がガドスと一緒に向かつたのは、この界隈では珍しいおんぼろの木で出来た建物だつた。入口の扉付近には蜘蛛の巣が張つており、変な顔の書いてある瓶が横向きに転がつていた。

ガドスはドンドンドンと物凄い勢いで戸を叩く。

ファリーダの言つように、これでは扉が壊れてしまうとレイルは思つたが、まさか本当に扉が壊れるとは思つていなかつた。

バギヤア！

腐りかけた木製の扉には、男の拳一個分の穴が開いた。  
そしてその穴から、目ん玉がこちらを覗き込んでいた。そして、  
バタンと扉が開く。

「きつさまー、遂にやりおつたわ！　この、ドアホウが！　ドア  
なだけに、ドアホウじゃ！」

中から出て来たのは、みずぼうしいぼう服を着た頭の眩しい老人  
だつた。

間違ひなく、ボル老人である。

「すまねえなーボル爺よ。まさか穴があくとは、このドア弁償してやるうか?」

「はあ? ベンゾーって誰ぞな?」

「弁償! ドアをつけかえてやるうかつてことだよー。」

「フム、モマを追っかけて来るのかいな。アレは美味しいからの  
お。」

ガドスは、うなだれてため息をついた。  
ボル老人は想像以上に耳が遠かつた。

「まあ、何か用なら中には入れや。」

ボル老人は、3人を部屋に案内する。  
そこは、ガドスの家よりもはるかに汚くて、臭かつた。



**また有料（前書き）**

ボル爺は、百年草を加工してくれるようだが……

## また有料

「して、要は何じやの？」

酒をぐびぐび飲みながら、ボル爺さんは聞く。ガドスは大きな声で応えた。

「△ダミードールを作つてほしいんだ。いつものようにな。」

「ほう、またあれか。じゃあ、そこの少年らは冥術師つてことかいな？ まったく、金のかかる奴らじやの。人一人生贊に捧げりやタダじやろが。」

「そんなことができないよ！」と、ケーナは大声で言つた。

「その、△ダミードールについては本当にレインザードに効くわけ？」

ボル爺さんは、コップをトンと置いて胸をポンと叩いた。

「当然じや！ 今までに一度としてしきじつた話を聞いた事が無いわい。」

「……何が、うせんぐせになあ……」

「小娘よ、小声で言つても聞こえどるぞ。それにしても、お主、見るからに色氣も胸も無いのお。女としての魅力が無いわい。」

「ちよつ、何ですかー？ 人が気にしてる事をサラッと言つなんてー」

ケーナの顔が赤くなつた。ムキと声を出して爺さんに詰め寄り  
そうだつたが、レイルが止めた。そしてか細い声でレイルは、ボル  
老人に話かける。

「……あの、それで、やつぱり、お金がかかるんでしょうか？」

「勿論じや。」小セコレイルの声は意外にもボル老人の耳に入つ  
た。

ボル爺さんの耳は金と女と酒の事なら聴力が百倍になる都合のいい耳なのだ。

「ええと、それはどれくらいの……」

「つむ、しめて50000ペサートじや。」

レイルの顔は、さーっと青くなつた。



## 一か八か（前書き）

レイル達は、臭くて汚いボル爺の家を出た。

## 一か八か

「まったく……あの爺さんとんでも食わせモンだわー。」

ケーナはあの臭い家を出てからも、まだブンブン怒っていた。結局、今回もケーナが払う事を申し出たが、ボル爺の事は不満なようだ。

レイルは、何だか色々と申し訳ない気分になつたので、彼女に謝る事にした。

「ケーナ、『めん』……」

「レイルが気にする事無いんだよ。悪いのはあのスケベ爺さんなんだから。」

「でも……」

レイルがあまりにも元氣無さそうだったので、ケーナは怒りを納めてにつこり笑つた。そして、今日も商業地に行こうと言つ出し、2人は馬を走らせた。

今日の商業地は、昨日にも増して賑やかだった。何やら、道のど真ん中に人の行列が出来ている。2列で並んでいるが先が見えないほどに長かった。

「これは、何の列なのかな？」レイルは興味深そうにケーナに聞いた。

「ああ、 Irene。」ケーナは腕組みをする。

「これは、1年に一度の『砂漠くじ』を貰つてるんだよ。」

「何そのサバククジって？ 何か当たるの？」

「勿論！ 1ペサートで1枚買えるんだけど……一等賞は何と70000000ペサートなんだよ！ すばらしそう？」

「えっ！」レイルの目が輝く。

「それが当たったらケーナにお金返せるねー。貰つてみようかな

……」

「おー、乗り気だねえ。じゃあ、列に並んでみよつか！ 早くしないと売り切れちゃうかも知んなし。」

「うんー。」

2人は暑い日差しの中、長い長い列に並んだ。人の熱も加わって汗がドンドン湧いて出た。



セツヒテスルヒツメツヒトモハ（前輪也）

レイルは、△砂漠くじ△を置つてファーリーダの家に戻つた。

セツヒテ販布ヒテまつりあぐ

「へえ、なけなしのお金で買つたんだ。やるねえ、レイル。」

ファリーダは、少年の方を揉んだ。

そして、入れて来たコーヒーを机に置いた。勿論向こう側に座っているケーナの分もある。

ケーナはふ一つ息を出してからケーナに話しかけた。

「ホント、あの列に並んだのが一番疲れたよ。もう汗だくだくまあ、ボル爺のくさい部屋にいるのも乐じやなかつたけどね。ガドスのおつちやんもアレだけど、ホントあの爺さんはファリーダに遇わせたくないな~」

「それ、さつきも言つてたわよ。よつぼりそのボル爺さんつてのは困つた人なのね。」

「うん、金と女の事になると急に耳が聞こえるようになる都合のいいお方でしたから。おまけに人の事を色氣ないとかペチやんこだとか言つてくるし。」

「聞くからにエロいお爺さんだね! でも、ペチやんこののは当たつてるんじゃない?」

「ファリーダっ!」

〔冗談よと言いながら、褐色肌の彼女は褐色のコーヒーをケーナの

胸下に置いた。

ケーナは、不機嫌そうに「ぐんぐんと」コーラーを飲んでプハーと大きく息を吐いた。

「それにしても、レイルつたら私が払つた言つてゐるのに断るなんて真面目だなあ。」

「だつて……」レイルはもじもじする。

「これ以上人のお金借りるなんて悪いよ。返せる当ても無いんだから。」

「くじの一枚や二枚どつてことないのに。」

「ケーナは気にしないかもしないけど、それに甘えちゃいけないと思うんだ。出来る限りは僕が自分で何とかしなくちゃいけない。もし、このく砂漠くじへが当たつたら、今まで払つてもらつた分全部返すからね。」

「ふーん」ケーナはレイルの考えに感心した。

「ただ、分かつてると思つけど、それが当たる確率はすつゞい低いよ。なにせ何百万枚と出回つているんだからさ。くじはお楽しみと思つておいた方が良いと思つよ。」

レイルは頷いた。そして、財布の中に挟まれたくじの数字を確かめる。

3枚買つたこのくじが、意外な結果をもたらす事をこの時は誰も予想していなかつた。



## ニモニア ブラリタイへ（前書き）

ボル爺の人形が完成した。  
ついに白蛇の神殿へ向かうレイルとケーナ。

## 「オーファーブラリタイへ

2日後、約束通りボル爺は「ダニアードール」を完成させた。

「これさえあれば、レインザードなど恐るるに足りんぞ。」

「ありがとうござります。ボルお爺さん。」

「何々、金をもじれば約束は守るぞ。」

レイルが渡された自分の手首くらいある人形は、可愛らしいのか  
氣味が悪いのか微妙なところの顔立ちをしていた。手に当たる部分  
には変な文字が書いてある。

「よしー」ケーナは、レイルの方を叩いた。

「それじゃあ、早速神殿に行こうよー。」

2人は馬に乗りデルアラスの門を出ると、馬で西に駆けた。  
走り続けて1時間弱が過ぎたころファーブラリタイ神殿がその姿を  
現す。

「随分と荒れてるね。」

「うん

馬を下りると2人は神殿の入り口に近づいた。

普段は人の寄りつかないその石造りの建物は、ひびが目立ち、周りの柱は殆どが倒壊していた。しかし、かつて冥術師達が住んでいただけあって、神聖な雰囲気は漂っていた。壁に描かれた獅子の絵は、こちらを強く見据えてくる。

「ここの中に、レインザードがいるのね！　レイル、慎重に行くわよ。」

「そうだね、中がどうなってるか分からないし。」

神殿の中の暗闇に、2人は足を踏み入れた。

闇を照りす光（前書き）

神殿の内部は闇に包まれていた。

ファーブラリタイの中は漆黒の闇だ。

燈す光も無く奥は吸い込むような暗黒に包まれている。

ケーナは、持ってきた松明を取り出しだが、レイルが火をつけるのを止めた。

「えっ？ こんな真っ暗闇を進もうって言ひの。」

「ううん」レイルは首を振った。

「僕のくデリアで何とかするよ。」

「あ、使えるんだ！」ケーナは手をパチンと合わせた。

くデリアは冥術の一つで、当たりを照らす光の球を作りだす。見習い冥術師でもほとんどが使える初步的な冥術だ。

レイルは手を前に差し出すと、ふっと目を閉じて念じた。

「辺りを照らす光の球よ、我に付き添え……くデリア（照光）へ

！」

ぱわつ。

神殿の中は一気に光を浴びて明るくなつた。

「へー」ケーナが、物珍しそうに発生した光球を見る。  
「やるじやん！ さすがレイルだよ。」

「いや、そんな、褒めるものでもないよ……」「しかし、言葉に反してレイルは嬉しそうな顔をしていた。

光球は術者の側に勝手についてくる、非常に便利なものだ。  
2人は両手を楽にしたまま、神殿を奥に進んだ。

暫く直線状の通路を進むと階段があり、それを降りるとまた通路  
が伸びていた。

通路の両脇には部屋の様なものが続く。冥術師がここで暮らして  
いたのだろうか？

2人は、それらの部屋を覗きながらゆっくり歩いた。

「ここも違うね……」

「うん。」

どの部屋も、空っぽだった。

家財等はみんな持つていかれてしまったのだろうか？  
残っていたのは、何かの骨ばかりだった。

「わざがにこんなところにはいないかな……あつー

「どうしたの？」

ケーナは何かに気付いた。

目の前、通路の奥に何かがいる！



**砂漠の蜘蛛（前書き）**

レイル達は、モンスターと遭遇した！  
戦闘開始！

3653 1705313131

目の前に現れたのは、大きな砂色の蜘蛛だった。  
ケーナは、剣を鞘から抜く。

「サンドスパイダーだ！」  
「うううところに住み着く奴だ。」

「やつぱり、危険なの？」

「勿論、あいつの吐く糸に絡められたら身動きとれなくなつてそのまま餌にならちやうよ。ひとまず後退するよ。」

2人は、後退し蜘蛛と距離をとる。

蜘蛛は、じりじりとこちらに近づいてきた。そして、矢張の詫

「うわっ！」

「ケーナ！？」

ケーナの体に糸がまとわりついた！

非常に粘着質で、一のままでは剣を振るう事が出来ない。

幸いにもレイルは無事蜘蛛の糸から逃れた。

「しまった……」のままじや……やられるー。」

「大丈夫だよ。僕が、何とかするからー。」

「レイル？」

少年は、特殊な構えをとる。冥術を使うためのポーズだった。この恰好でレイルは感じる。ケーナを守るために。

## レイルの実力（前書き）

レイルの冥術がモンスターに炸裂する！

## レイルの実力

^i30658 — 3653^

「眞の炎よ、眼前を焼き尽くせ！ バイダーレイヴ（火炎衝）  
^i—」

目の前に炎の波が現れ、大蜘蛛目掛けて流れで注がれる！  
大蜘蛛は炎に包まれて黒焦げになった。

「すごい……」ケーナは、レイルの放った冥術に驚いた。  
「灯りを点けるのよりすごい奴だね！ レイルって結構戦えるんじゃない！」

「いや……これくらいは……」

レイルは、照れくさそうに頭をの後ろをさすつた。  
謙遜する彼だったが、この炎の冥術の威力は褒められるレベルだった。

「ちくが、冥術師だ。」ケーナは、蜘蛛の糸をやつと振り払つことができた。

「私の使えない冥術いっぱい使えるんだ。羨ましいなあ。私は、回復系しか使えないからね～」

「ケーナも使えるんだ！ すごいね、独学で覚えたの？」

「うん……まあね。じゃあ、モタモタしないで進みましょっか！」

ケーナの音の戸惑い感じは気になつたが、レイルは突っ込まなかつた。

奥へ奥へ（前書き）

神殿の更に奥へ進む2人。

## 奥へ奥へ

それからも、2人は何匹かのモンスターに遭遇した。

砂ネズミのサンドラット。

大きなコウモリのジャバルダン。

光の幽霊ウォルオブイスプ。

ムカデ魔獣ドルオプケン。

など。

これらを、次々に退けて、神殿の奥深くに進む。長い道のりにも遂に終わりが近づいてきた。

「あれが、最深部かな？」

レイルが、一本道の通路の先みた先には他よりも大きな入口がある。

どうやら、彼の言つた事は本当のようだった。

2人は、ゆっくりその部屋に近づく。その部屋は、天井も高く奥行きがあるのが分かった。

「この蛇がいるのかな？」

ケーナは剣を手に持っている。

剣先が、冥術の光で怪しげに煌めく。

いよいよ2人は入口の中に足を入れる事となつた。音を立てずに、

静かに部屋に侵入する。

「……あつ。」入った瞬間レイルが小声で驚く。

「レインザードだ。」

部屋の奥に、堂々とした大蛇の姿が映し出されていた。

白鷹レインザード（前書き）

レイル達は、遂にレインザードを捉えた。

## 白蛇レイインザード

シユルルルルルル

独特の声がある。白き蛇の啼き声だった。

その体の大きさは、かの「アゴン」くらいそれ以上の大きさである。

「あれが、レイインザード……」

レイルはゴクリと唾を呑む。

さすが、神の使いと呼ばれるだけあって想像以上の威圧感だ。  
まだこちらに興味は示していないが、とぐろを巻いたその巨躯には容易に近づきがたい。

「ヤーー、ビービーッかな？」

ケーナは、袋から人形を取り出した。  
ボル爺のダミードールだ。

「つまくいくかな？」レイルが心配そうな顔をする。

「あのH口じごさんを信じるしかないわね。何とか距離を縮めて、  
この人形を置きましょう。」

2人は少しずつ白蛇に近づく。  
いつもからに気がつくか、気が氣で無かった。

一步。  
一步。  
一步。  
一步。  
また一步。

シャアツ！

レインザードが声を上げる。

レイルはビクついたが、また静かになると歩みを始めた。

一步。  
一步。  
また一步。

シャアアア！

レインザードがまた声を上げた。今度はびしりと付いたようだ。  
蛇は、顔をレイル達の方に向ける。



あれれ？（前書き）

田舎で、ダービーナーを『アバト』などと呼ぶのが……

あれれ？

「気付かれた！？ ょーし、えいつ！」

ケーナは、手に持つダミードールを蛇の方に投げつけた。ボル爺の言う通りの方法だ。こうして、あとはレインザードに食べさせれば大丈夫との事だった。

シャアアア！

白蛇は、ダミードールに喰らいつく。  
そしてあつとこづ間に自分のお腹に入れてしまった。

「よーし、これでいいはず！」

2人は、白蛇の様子をつかがう。  
おとなしくなるのを待つつもりだった。  
しかし、事態は予想外の方向に傾く？

「あ、あれ？ 何かおかしいな……」

「そうだね、何だか、こっちを見ているだけだ……」

シャアア

白蛇は、おとなしくなるなる様子ではなく、何とこうひびきがち  
くではないか！

「うわわっ！ な、何でー？」 レイルの顔が青ざめる。

「ちよっとー、あの爺さん、話が違つじやないのよー。」

2人は恐る恐る後退する。

「のまま飛びかかるでも來たらおしまいだ。」

一步。  
一步。  
また一步。

次の瞬間！

蛇がその動きを早めた！



白蛇が、レイル達に迫るー。しかし……

「わあああ！」

レイルは迫りくる蛇に對して逃げる事も出来ず立ちはだかった。  
思わず、声を上げてしまつた。

ケーナは、そんなレイルを庇つて剣を構えて何とか白蛇を迎  
え討とうとする。

しかし、体は震えていた。

蛇の頭部は、一目散に2人の目の前に向かつ。  
そして、ケーナの体と肉薄した時、意外な事が起つた。

＼ i 3 1 5 5 0 — 3 6 5 3 ／

「え？」

ケーナが驚くのも無理はない。

白蛇レインザードの動きがピタリと止まつたのだ。

そして、今まで威圧的だった雰囲気が薄れ、幾分おとなしい顔つ  
きになつた。

ヒュルルルルと今までとは違った声を出している。

「これは一体……」レイルは、啞然としていた。

ケーナは、剣を納める。

戦意が無いのがわかつたからだ。

「レイル……大丈夫みたいだよ。この子、私達を食べるつもりはないみたい。」

「そ、 そうなの？」

「ああ、 行きましょ？ あの奥に、 目的のものがあるはずだから。

」

「大丈夫かなあ？」

ケーナを先頭に、 2人は奥へと歩き出した。

白蛇は牙をむく事はなく、 ただ2人についてくるだけだった。



## 蛇真珠入手！（前書き）

原因不明だが白蛇がおとなしくなった。  
いよいよ、目的の珠の入手に取り掛かる2人。

## 蛇真珠入手！

蛇をうしろにゅうくつと奥に進むと、確かにそこには光り輝く珠が沢山あつた。

「おぎれもない」。「蛇真珠」と呼ばれるものだつた。

音をなるべく立てな言つようひ、レイルはその美しい無数の珠に近づいてそのうちいくつかを小さな革カバンの中に入れた。そして、蛇の方に向き直る。

白蛇はおとなしく、じゅらりを見つめていた。

ケーナは、まるでこの蛇言葉が解るかのようにじゅうじゅうとわざつた。

「『めんななを』レインザード。ちよつと、お邪魔しました。」

少女が柔らかい声でそつと語り、白蛇は退路を遮るのをやめて、横に退いた。

2人は、そんな蛇を脇にして、もと来た道へと歩き出す。

最初の試練は成功した。

蛇の部屋から出た2人は、ほつと肩を撫でおろした。



## ケーナの謎（前書き）

神殿を後にして、デルアラスへ帰る2人。

## ケーナの謎

神殿の埃臭い闇から抜け出した2人は、馬に乗り元来た道を引き返す。

太陽は、まだ沈まず強い光で照らしてきた。しかし、行きの様な不安な気持ちが無い帰り路は楽なものだつた。馬が砂を踏みつける音を聞きながら、ケーナはのんびりと手綱をゆらゆらと揺らす。

「いや、大成功だつたね！」

「そうだね。」レイルは頷いた。

「でも、ケーナがいなかつたら今頃は食べられてたかも。」

「いやいや。」ケーナは右手を振る。

「ボル爺の人形の効果が出るのが遅かつただけだよ、多分。私もびっくりしたけどね。」

「そうかな……本当にそうだったのかな？ だって、ケーナ。レインザードの言いたい事がわかつてたみたいに見えたんだけど。」

「え？ ああ、そういうば何となく。でも、心当たりは無いなあ。あんな白蛇と会ったのは初めてだし。」

「ふうん……」

レイルは、何だか腑に落ちないとこりがあったが、それ以上追及する気は無かつた。

何にしろ、生きて目的を果たして帰れたのだ。今はそれで十分だつた。

だから、次に口にした言葉はお礼の言葉だつた。

「ケーナ、本当にありがとう。また、頼っちゃつたね。」

「そんなことないよ！ レイルの冥術すじかつたじゃない。今日は、ホントに見直したよ。」

褒め返されて、いつもの如くレイルの顔は赤くなつた。  
馬は、それを冷やかすかのようにブルルンと鼻息を荒くする。

デルアラスの壁が2人に再びその姿を現したのは、太陽が陰りを見せた時だつた。

## 第一の試練（前書き）

第一の試練を終えたのも束の間、エドガルドは次の試練を出す。

## 第一の試練

「ほお、よくぞ持ち帰った」

美しい真珠の様な球を手に取ると、エドガルドはフムフムと頷いた。

神殿の薄暗さ暗さに引き立てられるように珠は淡く輝く。

「エドガルド様……」

レイルは持つてきたにもかかわらず心配そうにした。  
しかし司祭が表情を緩めると、体の力が抜けた。

「よし、これで第一の試練は終了じゃ。よくやったな」

「は、はい！」

「では、次の試練を」「え？」

「……え？」

もう次の試練ですかと言いたがつたが、レイルは口を閉じた。

「レイルよ、良く聞け。次の試練も大変なものじゃぞ。言葉にすれば簡単じゃがな」

「は、はあ……」

「レイルよ」エドガルドは、表情を硬くする。

「同祭様……」

「お前、女になつて来い。以上

「えええっ！？」

横にいたケーナ共々に、驚きの声が神殿に響き渡つた。

## 性転換ー?（前書き）

第一の試練の内容は、レイルが女になる事だった。

「ちよつとい、司祭様! それって、どうこいつとななのよー?」

ケーナの慌てた顔にも、エドガルドは表情を変えない。淡々とした言葉で応対する。

「言つた通りじや、ケーナよ。此度の試練、レイルには女の子になつてここにやってくることが条件なのじや。言つておくが、心が女になつたとか言つて女装して来ても無駄じやぞ。心身ともに女性になつた状態でなくてはならん。方法は、自分達で探すが良い」

「えーっ! そんな無茶なー レイルが女の子になつたら可憐いだろ? うーとは思ひますけど」

「ケ、ケーナ!」レイルの顔が赤くなる。

女になる冥術なんて聞いた事がない。

それに、女になつたとしてその後どうするんだらう?

男に戻れるんだろうか?

少年の迷いをよそに、司祭は話を終わらせる。

「では、レイルよ。次は女の子になつて戻つて来い。それまでは、ここに来なくともいいぞ」

「……は、はい」

レイルは、鈍い返事をした。そして、そそくさと神殿を後にする。色々と聞きたい事はあったが、やめておいた。

## ノエリーは何でも知っている（前書き）

女性になる方法を探すため、2人が訪れたのはノエリーの家だつた。

## ノエリーは何でも知っている

「ふーん、今度もまた厄介なお題を出されたねえ。」

ノエリーは、メガネを手でカクカクしながらふふんと鼻息を荒げた。

そして、椅子に座る2人を流し見る。ケーナは、自らアテにして来た割に自信なさげだ。

「ノエリー、どうなの？ なんとかなりそつ？」

「うーん、厳しいねえ。女の子にそんな簡単になれるんなら、世の男どもはたかって女の子になっちゃうだろ？ し。永遠のロマンだからね～ 異性になるつてのは、私だって、男になってみたいと思つたことあるよ。」

「ノエリーは、男になつてもあんまり変わらなそつな気がするけど……」

「なにおー！？ 私の乙女心を傷つけるよつた発言をしましたね、ケーナさん。その発言撤回しないとお姉さん怒りつちやうが～」

「冗談、冗談！ ごめんなさいノエリー。乙女心が残つてたのに気がつかなくつて。」

「わかれればよろしい！ いや、わかつてないでしょ！？ 今、さりげなく失礼な発言重ねたよね？」

ケーナは、皿を反らした。

ノエリーの皿は、そんな彼女からレイルの方に向いた。

「う、うめんなさい…」

レイルは、とりあえず代わりに謝った。

それを見ると、ノエリーも表情を緩めるしかなかった。

「君、正直ものだね～安心してよ、今の本気じゃ無いし。（ちよ  
つと真に受けた事は言つまご）」

「そーぞ。」ケーナも付け加える。

「ノエリーとは、いつもこんなんだから。気にしなくていいんだよ。

「

レイルは、ほっと胸を撫で下ろした。  
体に悪い冗談だとちょっと思った。

「それで、ノエリー。」ケーナは話を戻す。  
「女性になる方法は、あるの？」

ノエリーは頷いた。

「あるよ。このノエリーは一人でも知ってるんだから…」

## 女子、なる方法（前書き）

ノエリーが書く、女性になる方法とは……？

## 女の子に、なる方法

「じゃあ、早速教えてくださいよノエリーお姉さま～」

ケーナは猫なで声のよつた声で言つた。

色氣のないケーナだが、色氣のある声真似はなかなかに上手だ。ノエリーも、いつもの事なのかハーリと返事をした。

「いいよ！　じゃあ2人ともよーく聞きなさいな。」

2人は同時に頷くと、耳をノエリーに傾ける。女性になる方法と言つのは、この試練を抜きにしても中々興味深い事である。このような事に关心を持たない人間も珍しいだらう。レイルは「クリ」と唾を飲み込んだ。

「あのね、レイル君が女になるにはアンコについてるアレをはさみで……えへへ……」

「バカッ！　ノエリーの変態！」ケーナが話をせき止める。ノエリーが、えへへと笑い声を出す時は大概口クでもない出鱈目話なのだ。

「ちえつ、バレたか……しじうがない本当の事を言つよ。」

「最初から言つてよー」レーリーは、本氣で聞いてるんだから。」

「わーったわーった。まあそつ怒りなさんなよ、綺麗なお顔にしわができちゃうよ? んで、女の子になる方法だけど……まあ、さつきも言つたけど簡単じゃない。かといって、出来ない事も無い。今までにこの試練を通過した人間は結構いるんだからね。」

「じらさないで、早く行つてよ!」ケーナが急かす。

「モー、せつかく人がのんびり話そつと思つてるのに、しちうがないなあ。じゃあ、今度こそ言つよ。女性になる方法は……」

レイルは、再び睡を飲み込んだ。

続・女の子になる方法（前書き）

ノエリーは遂に女になる方法を明かす……

## 続・女の术になる方法

八一三二五八五 — 三六五三八

「それは憑依！ 靈をレイルにとつつかせるのよ！」

ノエリーの言葉に、ケーナはエーッと言った。  
そして、疑りの田でノエリーを見る。

「今度も、ちゃんと裏があるんじゃないの？ 何か代わりになる  
方法とか」

「ううん」ノエリーは首を振った。

「残念ながら、今回はマジよ。強力な女性の靈をとつつかせねば。  
肉体も女性に変異するんだよ」

「強力な靈？ なによそれ、普通の靈じゃないの？」

「そうだよ、この世に未練がある惡靈みたいなのじゃないと中々  
とつつかないし、肉体の変異も無いの。自らの体の再生願望がある  
靈じゃないとダメ。しかも、靈に取りつかれて魂を奪われる事もある  
んだ。そうなると……」

「どうなるんですか？」レイルが心配そうに聞く。顔がもう青か  
つた。

「肉体は乗っ取られて、あの世行き。そうなつたら、残念だけど

レイル君は人生諦めるしかないねえ」

「う……」レイルは寒気がした。

しかし、ここで引き下がるわけにもいかない。今までの努力が無駄になる。

「んにゃ、怖氣ずいたのかな？ レイル君。」

「いえ……やつてみます。それで、このあたりでそんな靈がいる場所なんであるんですか？」

「あるよ。」ノエリーはメガネをキラーンと輝かせた。  
レイルの勇気に感心した事と興味をそそられた事のあらわれだつた。

「そこは……」

「王家の墓さ。ナルアラスの古の王家の墓。」

「王家の墓！？」ケーナは、それを聞いて目を大きくした。

## 王家の墓（前書き）

女になるには、靈をその身に憑依する必要がある。ノエリーが格好の場所として挙げたのは「王家の墓」だった。

「あの……ノエリー、あそこは国で管理してるから入っちゃいけないんだよ！」

王家の墓は、デルアラスの国家遺産建造物として厳重に管理されていた。もし何もせす放つておいたら、墓荒らしに何をされるか分からぬからだ。実際、眠っている王族のミイラや金品を奪われる事件が過去にあった。ただ、その盗んだ人物は原因不明の怪死を遂げたと言う噂だ。しかし、そんなケーナの言葉に、ノエリーは動じる事は無かった。

「ケーナ、合法的に入る方法は十分あるでしょ？ 今までの冥術師の人だって、多分國に許可とつてるはずだ。それに、あんたはあの三角形のお墓に入る様な家柄でしょ？」

「そうだけど、言つほど簡単じゃないよ。お金の融通よりも大変かもしれない。まあ、レイルのためだし掛け合つてみるけどわ」

「やつすが！ レイル君、頼りになる友達見つけたね！」

レイルは、大きく頷いた。ケーナには本当に助けてもらつてばかりだ。

何か自分に出来る事は無いかと思つた。そして思いついたのがこの言葉だった。

「ケーナ、その、許可を取るとひもつて僕も行けるの？」

「ん？ そうだね、管理局なら私がいれば大丈夫だと思つけど…」

…

「じゃあ、僕も一緒に頼みに行くよ。全部任せることなんて悪いし」

「そつか！ 確かに一緒にいた方が逆に怪しまれないかもね。じゃあ、明日管理局に行こうよ。」

「うん！」

2人は難しい試練の前であるにも関わらず互いに微笑み合った。ノエリーはそれを見て、ちょっと羨ましいなと思った。

## 管理局との交渉（前書き）

王家の墓へ入る許可を得るために2人は管理局へ。

## 管理局との交渉

デルアラス総合管理局は、デルアラス中心地アリオンにあった。城とは高い壁一枚を隔てたところにあり、3階建ての赤レンガ造りの建物で大きな入口の扉には守衛が2人いた。

ケーナは、これを簡単に説得する事が出来た。  
胸にぶら下げるペンドントを見せただけである。

「どうぞ、お通りください」

番兵の1人はそう言つと、わざわざ扉を開けてくれた。普通の人間ならばここまでではないだろつ。レイルは、ケーナの身分の高さを実感させられた。

案内所で2人は行き先を尋ねる。

「王家の墓」を管轄する遺産管理課は3階にあるとのことだつたので、若い2人は勢いよく階段を駆け上がつた。ケーナは一段飛ばしで登つて行つたので、レイルよりも先に目的の階に辿り着いた。

「遅いよ、レイル！」

「ケーナが早すぎるんだよ……つかれたあ」

「あそこが、〈遺産管理局〉みたいだね！ 入口の札に書いてあるよ」

ケーナが指差したところは、随分遠くの部屋だった。  
視力良いなあとレイルは思った。

早速2人はその部屋に向い、部屋の扉をノックする。  
「どうぞ」と言う声が聞こえてきた。

「失礼します。」扉を開けて先に入ったのはケーナの方だった。

レイルは恐る恐る後に続く。

恋におじさん（前書き）

遺産管理局に入室した2人だが……

## 悪いおじさん

遺産管理局の内部は、とても静かだった。

人はいるのだが、静かだった。

張り詰めたようなピリピリした雰囲気が辺りに漂つ。

それらの発生源は真ん中の机に座る、整った髪の厳つい中年男性だろう。

彼が、この課の受付であった。

ケーナはそうでもないが、レイルは恐る恐る席に座る。体が震える。先日のレインザードと同じくらい怖い目をしていた。

「何だね？ 用があるなら早く言わないか！」

受付の男は短気であった。彼が机をドンと叩くと。レイルの体はビクッと痙攣した。どうしてこんな人が受付をやってくるのかわからなかつた。

「あ、あの……その……」

「声が小さい！ もうと声を出さんか！」

「はいはい」

委縮するレイルを見かねて、ケーナは口を開く。

「おじさん。私達は、王家の墓に入る許可をいただきに来ました。

「

「おじさんではない！」男はまた机を叩く。

「スカーケークという名前がある！ そして、小娘！ お前が誰だか知らぬが、王家の墓に簡単に入れさせることなど出来るわけがなかろう！？」

「あの、スカーケークさん」ケーナは、あまりに高圧的な彼の態度に力任せと来た。

「私は、ケーナ。ケーナ＝ファアールと言います。お聞きになつた事無いでしようか？」

「フン、そんな名前聞いた事ないわっ！」

「本当に？」

「ああ……うん？ までよ？ まさか！」

ケーナは、スカーケークが自分の素性に気が付いて、驚きを隠せないのを見るとしてやつたりと思つた。



## 態度一変（前書き）

ケーナの素性を知つた受付のスカラ - クは

## 態度一変

「やや、まさかそれほどの方がいらっしゃるとは…。まことにどう無礼な態度をとつてしまいまして申し訳ありません…」

スカ・クの態度は一変した。

恐ろしく腰が低くなつて、さつ もの「ワフモテの顔の皺は一気に減つた。

ケーナはその変化に笑いが起つしそうだが我慢して言ひつ。

「いいのよ。それで、王家の墓に入る許可はすぐ」「貰えるの?」

「そうですね、あなた方の入るお墓でもありますから」

スカ・クはへ口へ口と言ひつ。

「この子も、入つていい? 私が信用を置いてる子なの

レイルも、スカ・クの表情が緩んだので皿口紹介をする事が出来た。

「レイルといつます、よろしくお願ひします!」

「はい、わかりました! 早速許可証を発行いたしましょ!」

最早、別人だ。

後ろにいる、係員が書き始めてから10分で許可証は発行された。

「はい、どうぞ。」

ケーナは、許可証を受け取ると上機嫌で言った。

「ありがとうございます！ 早かつたですね」

「なになに」のくらい我々には簡単な事ですよ……といひで、一つだけ注意しておく事があります。」

「何？」ケーナが聞くと、再びあの恐い顔が戻っていた。

「くれぐれも、地下4階より下には行かないようにしてください。命の保証ができませんから。」

レイルは、グッと息をのんだ。

## 王家の血（龍書丸）

王家の墓に入る手続きは容易にとれた。  
2人は歴食をとる。

商業地は、今日も人で賑わっていた。

毎日新しい商品、食品が増えていき見るに飽きない。

今日のレイルは、ファーリーダからもらつたお小遣いで「サンドバーガー」を買った。焼いたバトラ牛の旨みあふれる切り肉に玉ねぎ、ファタ葉を重ねてそれらをパンで挟んだ食べ物だ。レイルが一度かぶりつくと、肉と野菜と香辛料の絶妙なハーモニーが口に広がった。

「しっかり、あのおっさんも分かり易い人だつたな」

と、隣に座るケーナが言う。手には、袋入りのオニオンリングを持つていた。

まったく、そうだつた。上には甘くて下には冷たいのがあの受付の男だつた。普通の人間、例えばレイル一人で行つたら、酷い目にあわされそうだ。あんな人間を公職に就かせるのは納得がいかないとケーナは思つていた。そんなケーナにレイルは、残念そうに言う。

「すごいね、ケーナの事知つただけであんな風になるんだもん。僕が行く必要、やっぱり、あんまり無かつたかな？」

「そ、そんなことないよ！ レイルが言つた方が説得力あつたの

は事実だし。」

ケーナは、いつやってレイルに褒められていくのは良い気分ではなかつた。

今までもそうだが、自分の実力で何とかしているとは言い難い。「王家」の名と財産で何とかなつてているのだ。

王家の血。

そう、私は、王家人間。

ケーナは、表情が固まつた。

それを見て、レイルが心配して声をかける。

「ケーナ？ 僕、何か悪い事言つちゃつた？」

「ううん……レイル、王家の墓つてさ、良く考えたらいつか私も入るんだよね。」

「えつ、やうなの？」

「ちゃんと死ねたらね。ミイラになつてあの中で眠る事になるかも知れないよ。」

「そなんだ」

「入つた事無いけど、どんな所なんだうな？ 悪霊も出るつて言つから、あんまり良いところじやなさうなんだよね。何だか寂しそうな感じだし。そんなとこで、ずっと眠りつづけるなんて嫌だ

なあ。」

「ケーナ、まだそんな事考えなくていいよ。ケーナが死ぬなんて  
考えたくないし」

「レイル……私さ……つうん、そうだね、まだ早いよね！　ごめ  
ん、何か辛気臭い方向にもつていきそうになっちゃったよ。はい、  
お詫びの印！」

ケーナは何か言おうとしたのを「まかすよ」に、レイルにオーラ  
ンリングを一個手渡した。

ルイ・フィリップ（路易菲利普）

レイルとケーナは、王家の墓へ向かつ。

2日後、レイル達は「王家の墓」と馬を走らせた。白蛇のいた神殿よりは近い距離にあり、30分ほどで辿り着く事が出来た。デルアラス王家の墓地とも言える場所なので、利便性を意識して建てられたのかもしれない。

2人は昨日、ノエリーに色々と王家の墓と憑依についてのレクチャーを受けていた。ノエリーの熱弁は、聞く者を引き付けるものを持つており、長かつたが充実した時間をレイル達は過ごす事が出来た。

「あつ、見えてきた！」

ケーナが指差す先には、砂色の三角形の建造物が見え始めた。太陽の光を浴びて神秘的な威光を放つその姿に、レイルの心は躍った。

あれが、王家の墓である「ペリラッシュ」。  
デルアラスの歴代の王達の眠るところ。

近くまでやつてくると、人の姿があった。  
王家の墓を守る監視員だ。レイル達に気が付くと馬に向って近づいてきた。

「お前達は何者だ？　ここに何の用だ？」

ケーナは、かけている革の鞄から、例の許可証を取り出して、男に見せた。

男は、うんうんと頷く。

「よし、では向こうに馬を預けて来い。それから案内してやる」

張られたテントの裏側に砂漠馬を停めると、2人は監視員の男に連れられてピラミッドに向か歩きだした。近づくにつれ、その三角形の建物の大きさが実感に変わつてくる。こんなものを昔の人はよく作ったものだとレイルは思った。

どれくらいの時がかかったのか。  
どのくらいの月日が流れたのか。

ペリラシは今日も堂々たる姿で砂漠に座つてゐるのだった。



## 大ピラミッドの眺望（前書き）

ピラミッドの入り口まで案内される2人。

## 大ピラミッドの眺望

ピラミッドの入り口は、大きな石造りの階段の上にあった。

監視員に従い、2人は階段を上つて行く。

一段あたりが大きく、それが100段くらいあるので上るのは結構大変だった。

途中、舞い上がった砂が生暖かい風に乗つて吹き付けた。登り終えると、テントの群を見られるくらいに高いところまで来ていた。

「うわあ、良い眺め！」

ケーナは無邪気な子供っぽく喜んだ。レイルは、もっと高い塔に登つた事があるせいで、それほど何も思わなかつた。

監視員は2人を見て、微笑む。

「どうだ、君達。なかなかいいものだろ？」

「そうですね！」ケーナは嬉しそうに言つ。まるで、観光旅行でもしているようだ。実際、前回の試練よりは旅行つぽかつた。

国が管理している施設なので、この前の廃墟の様な危険は少ないと見られたからだ。

奥まつた入口には、もう一人槍を持った番兵がいた。

監視員がその男に話しかけると、番兵はするりと入口から退いた。

「しかし、君達だけで大丈夫かね？ 許可は、確かに貰っているけど。」

「は、はい。何とか。」レイルは、しどろもどろに応えた。  
本当は、誰か付いてきてほしいものだが、色々と問題が出てくるので、出来ないのだ。

要は、入ってはいけないとこに2人は入るつもりだった。

## 内部潜入（前書き）

「よこよこパリハシ」の中に入るケーナとレイル。

ピラミッドの通路は、この前の神殿と比べて狭かつた。  
しかしどこにどこに電燈があり、この前のように暗闇を心配する  
必要は今のところない。

モンスターもいないし、内部はなかなか綺麗にある。

さすが人間が管理しているだけある。  
色々なところに手が行き届いている。これなら安心して進む事が  
出来る。

通路は下に向っていた。  
デルアラス王家の者が眠っているのは、砂漠の砂面を通り超えた  
地下だそうだ。

「ふーん、思ったより。不気味じゃ無いね！」

ケーナは、頭の後ろに手を組みながら背伸びして言った。  
レイルも同感だった。しかし、もう少し進むと雰囲気も変わるか  
かもしれない。

歩き続ける事20分弱。通路が急に広くなつた。  
レイルは辺りを見まわす。

石壁に、様々な絵が描かれている。

鳥の顔を持つ人間が杖を持っている姿。

猫のような生き物。

謎の植物。

巨大な目。

どうやら、いよいよ王家の墓の本体に近づいてきたようだ。壁に掛けられた松明がゆらゆら照らす部屋を2人は進む。

鉄製の扉で閉じられた部屋が幾つも姿を現した。  
きつとミイラが眠っているのだろう。或いは財宝がしまってある  
のかもしれない。

しかし、これらの扉を開ける必要は全くなかった。  
レイルが向かうところは、ここからまだずっと奥にあるのだ。

更に、階段を降り、部屋を進む事を数度繰り返す。  
そして、遂に地下4階と思われるところまでやってきた。

目の前には立て札が置いてある。

ケーナは、それを見ると、声を出してレイルに内容を伝える。

「この先危険、関係者意外絶対に侵入するべからず。入ったところを見られた場合、犯罪とみなしどルアラス国裁判にかけられ然るべき罰を受けてもひつ。……だつて。」

それを聞いて、レイルはちょっと怖くなつた。



禁断の領域（前書き）

禁断の地下四階に進むレイル達。

「灯りが点いてないね本当に誰も入らないみたいだね」

ケーナが、そう言つて。レイルの方を向く。  
言葉にしなくても、冥術を使ってほしこと言つている事はわかつた。

「テリアだね。うん、まかせてよ」

レイルは、この前の様に光の球を作りだした。  
光の球は、地下四階の暗闇を照らし出す。

「こつからは、慎重にいかなきやね。モンスターが出るかもしけないし。」

ケーナは、携えた剣を抜いた。  
いつでも、対応できるようにするためである。

「ケーナ、足元や天井にも気をつけてね。ノエリーが言つてたから」

「ああ、トラップの事ね。うん、何だかヒヤヒヤするなあ

王家の墓の禁断の領域には、盗賊などの侵入者達を寄せ付けぬよう様々な仕掛けが張り巡らされていると言つ。とにかく、非常に危険な場所なのだ。監視している兵士たちですらその構造は熟知していないらしく、未知な部分も多い。また、ここに入つて死んだ人間は数多く、彼らの怨念は地下の闇に漂つており、侵入者を仲間へと誘うと言う。

そんな場所に、レイルとケーナはたつた一人だけで入つて行つた。他人には子供2人がこんなところに入ると言うのは信じられない話だ。

しかし、彼らには何か底知れぬ自信があつたのだった。

今の2人なら何とかなる。  
ケーナも、レイルも心のどこかにそんな気持ちが芽生えていた。

迷宮（前書き）

禁断の地へ侵入したケーナ達だが……

ゆつくり、ゆつくりと2人は足を進める。

道は入りくねっていてかなりややこしい。迷路の様だ。

あちらこちらに十字路があるため、どうにかわかるかも判断が難しかった。

適当に歩いていては方向感覚が狂って道に迷うことだらけ。

これが、禁断の地の罠の一つとも言えそうだ。

しかし、これに対してはレイルとケーナにも対策はあった。

ノエリーが、ある程度の構造を地図にしてれたのだ。

これで、基本的に道に迷う危険は薄れた。

しかし、罠の位置までは完全に把握していないので、そちらはかなり注意しなくてはならない。

「静かだね……」

ケーナはひそひそと言つ。レイルはそれに頷いた。

「モンスターは、いないのかな？　とにかく、気をつけないと。」

地下5階への階段までは何とか辿り着いた。目的地の地下8階はまだ遠い。地図で見ると、内部は更に広くなっていた。

変わらぬ巨大な迷路が続く。

足元に何かの骨が落ちていた。ここで死んだ人の物だろ？

一いつ目目の十字路に差し掛かつたところで、ケーナが何かに気付いた。

「うん？ あそここの地面、何だか怪しいね……」

レイルも、彼女が指差したところを見る。

確かに、土に四角形の線が浮かび上がっている。

「罠かもしれないね。どうしよう？」

「うん……ノヒリーの地図にも書いてないね。とりあえず、触るのは危険だしこの道は避けた方が良いかもね。」

ケーナの判断で、一旦十字路を引き返し、戻った先の最初の十字路を右手に進んだ。

しかし、この判断が2人に大きな問題を引き起こす。



**眼（前書き）**

眼を看破したつもりの2人だったが……

その通路には、一見何も異の形跡は無かつた。  
2人は、ここで若干の油断をしてしまつた。

古代文明が造り上げたトラップは、予想を越えたものだつたのだ。  
彼らがある部分を通過することで働くセンサー式のトラップが起  
動する！

前方の十字路にあつたトラップは「」に誘導せしめるためのダニー  
でもあつたのだ。

「わー？」

レイルが驚いて声を出す。

それもそのはずだ、急に辺りが真つ暗になつたのだから。

「うわー？」ケーナも戸惑つ。

「どうこいつことなの？」テリアが急に消えるなんて…」

レイルは暗闇の中、困った顔をした。

「これついで、多分く封術くだよ。じつや僕達異にかかつたみた  
いだね」

「しまった！ 判断が甘かった。どうしよう、『トリニア』はもう一度使えないの？」

「やってみるよ。……」

レイルは、『デリア』を使おうとした。しかし、だめだった。何も起こらない。

「どうやら、冥術が使えなくなってるみたいだ。ケーナ、松明を使うしかないよ。」

「そっか。多めに冒険セット持ってきて正解だったね。」

ケーナは、松明の一本を取り出すと火をつける。『デリア』ほどではないが、辺りは構造が見えるほどに明かり始めた。

2人はまた歩み出した。

「なかなか、手ごわそうだね」レイルは、ケーナの後ろで叫びた。

「うん、『気を引き締めないと』

しかし、そう言ったのも束の間。

2人は更なる罠の連鎖にかかる事になる。



**眠眠（めんめい）**

冥術が使えなくなつたレイル。  
次に待ち受けるのは？

松明を手に持つケーナを先頭にして通路を進む。

次々と曲がり路があつたが、ノエリーの地図を信じてそれに従う。

しかし、それがあだになった。

松明の火が巻き起こす熱は、新たなる罠の引き金になる！

「う、わっ！？」

突然地面に穴が開いた！

2人を丸ごと吸い込む大きな穴だ。

2人は、その穴に、落ちた。

あああああああああという声と共に落ちていく。

かなりの高さからの落下だ。

このまま落ちたら、死んでしまう！

ガキン！

ケーナは、とつせに手に持つ剣を壁に向つて思い切り突き刺しうら下がる。

そして、レイルの手を掴んだ！ 万事休すである。

「大丈夫！？ レイル。」

「うん、大丈夫だよ。でも、どうじょうかな？」

レイルは、恐る恐る下を向いた。

穴の底は暗くて見えない。吸い込まれるような暗黒だ。しかし、何かの音がする。

ぱちやん  
ぱちやん

水の音だ。水が水面に落ちる音だ。  
それもかなり近い。ひょっとすると、下は水だまりになっているのかも知れない。

「こ、ここから、落ちても大丈夫かもしれないよ。下が水なら衝撃も吸収されるかも。」

レイルはケーナに言った。

「そうだね、このままぶらさがつてもどのみちダメそうだ。よし！ それじゃあレイル、壁際に擦りつきながら降りて行つてよ！」

「うん！」

レイルは、ケーナの手を離すと、側面の壁に飛び付き、無理やり手足を引っかけて落下スピードを軽減させながらズルズルと下に向う。



## 水面でドッキリ（前書き）

落とし穴に落ちた2人は更に大変な目に！？

## 水面でドッキリ

ザブゥン！

レイルの予想通り、穴の底は水たまりだつた。正確には、地底湖と言つた方が正しいだらうか。

足をバタつかせながら、レイルは試しに「テリア」を使ってみる。光の球は再び現れた。どうやら、ここまで冥術封印の罠の効果は無いらしい。

辺りが照らされる、光球の映し出す部分には陸となる部分は無かつた。

「ケーナ、どうやら大丈夫みたいだ！ 普通の水だよ！」

ザブゥン！

ケーナも続いて水に入った。装備が重いせいなのか、それとも彼女が重いのか、水しぶきが一際大きかった。

「ブハー！ 砂漠の地下にしては水が多いなあ。オアシスから引いてるのかな？」

「わかんない。とりあえず、どうにかして出口を見つけないと。」

「そうだね、レイル。けど、ここって何だか嫌な予感がしない？ 何か、ここに落とされてそれで終わりって気がしないって言つた

……

「まさか……」

ケーナの悪い予想は当たつていた。  
2人にゅらゅらと近づく何かがいるー しかも、1つでは無い。  
囲まれている！

「うわわっ！」

レイルが慌てる。

「これは……砂漠ワニ！ こんなところにいるなんて……」

ケーナは、正体を見破つた。しかし、この状態では、上手いこと剣を振るうのは難しかった。増してや数が多くなる。

「のままだと、ワニにおいしく食べられる事だろ？。  
2人にとって最大のピンチが訪れたよつに見えた。



## ワニの氷漬け（前書き）

ワニの大軍に水中で出くわしたレイル達だったが……

## ワニの氷漬け

しかし、レイルには冥術があつた。  
とつさに、彼が放つたのは氷の冥術だ。

「抗うものよ、凍てつけ！ <ラムサライズ>！」

ビシイッ！

レイルの前方の水がワニ共々に凍りつく！  
水面にできた氷は分厚く、同時に陸地も出来た。

「ケーナ！ まずは氷の上に乗るつー！」

「よしきた！」

2人は大慌てで氷の上に泳ぎ着く。

これならば、ケーナの剣も容易く振るえるだらう。

残ったワニ達はケーナ達に近づく。

しかし、状況は2人に有利になつてゐる。

「とにかく、このワードを一掃しなくては出で口も探せないね。」

「うふ、とりあえずもう一度『ラムサライズ』で凍らせてしまおう。」

ビシイツ

レイルの一度田の冥術で、ワニ達は全て凍りついた。

氷の一部を割って水の中を見てみたが、他にはもういないようだ。ようは全滅である。ワニ達にはちよつと申し訳ないなと思つたレイルだった。

「よし、出口をやがそつよ。」

ケーナは、剣を鞘に納めて泳ぐ態勢に入る。  
水中のどこかに出口があると見たのだ。

結局、その予想は、当たつていた。

潜つたケーナが再び水面に上がつた時には笑顔が零れていた。

「あつたよ！ どつかに通じる穴みたいなのがある。ちよつと泳がなきやいけないけど大丈夫？」

「うん、泳ぐのは割と得意なんだ。冥術もあるし、何とかなるよ」

張った氷の隙間から、2人は水に飛び込んだ。

水中に身を泳がせて（前書き）

水にもぐつて出口を探す2人。

## 水中に身を泳がせて

オアシスから引いているのか、水の透明度はすこぶる高い。  
「テリア」の光球に照られた水中は、まるで水が無いようで、  
2人は、空中を浮かんでいるような錯覚にとらわれそうになつた。

2人とも泳ぎは得意だった。

砂漠に住むケーナが、泳げるのは意外である。彼女はオアシスなどで泳ぐ練習をしていたのだ。

水深10メートルはあるだろう。深い地底湖だ。  
ところどころ、美しい魚が泳いでいる。

ケーナの言つた通路らしき穴が見えてきた。

特に水の乱れる様子もなく穏やかだ。

2人は、足をばたつかせてそこに向つて、四角形の通路に入り泳ぎ進んだ。

特に、危険な生き物もおらず、暫く進むと、遂に、空氣のある場所に辿り着いた。

ケーナとレイルはそこに顔を出すと、ふはーと息を吸つた。

「よかつたあ。どうやら、道があるみたいだね！」

「うん。」

2人が水から上がった先には通路があった。  
どういう役割があるのかはわからないが、どこかに通じているようだ。

2人はその道を慎重に進む。

持つていた道具は、皆濡れてしまった。  
たいまつ  
松明は湿つてしまつたから暫くは役に立たないだろう。

再び罠にはかかるまい。

2人はそう決意していた。次にかかれば、命は無いかもしけないと思ったからだ。

王家の墓の冒険はまだまだ続く。

銀の部屋（前書き）

謎の通路を発見したケーナ達は、それを進む。

その通路は一本道で、王家の墓内部と同じ素材の壁で覆われていた。

物音はせず、ただ、2人の土を踏む音が響いた。

「じゃ、どこに続てるんだろう……」

「そうだね、どこかには出ると思つたけど。結構意外なトコに出来ちゃうかも知れないね。」

あの落とし穴は深かつた。

少なくとも、地下4階よりはずつと下の階に位置するのだひつ。

ノエリーの地図にも、ここは描かれていない。

そもそも、まだ濡れているので開く事が出来なかつた。  
とにかく2人に出来る事は前進だつた。

何かの目的で作られた通路なのだろうか。

罠は見当たらぬ。しかし、2人は慎重さを崩さなかつた。

「あつ、道が開けた！」

ケーナがそう言つと、目前の壁は切れで大きな部屋が姿を現した。壁には、銀で描かれた豪華な古代絵が、昔の姿のまま残つてゐる。

「もしかすると……」口ひりつて。「

レイルは手ごたえの様なものを感じた。  
もしかすると、運良く目的の場所に辿り着いたのかかもしれない。  
そう思った。

銀は、靈を退ける効果がある。  
つまり、この階のどこかには、ノエリーが言つ強力な靈の集まる  
部屋が存在する可能性があるので。

「ケーナ、意外と近いかもしないよ。僕ら近道をしたのかもし  
れない。」

「うん！」ケーナも同感だった。

「田的の部屋を探そう！ そして、上手く脱出しないとね！」



**棺桶の部屋（前書き）**

ケーナ達は、謎の階層を探る……

銀の絵が壁に無くなつた先には、幾つもの部屋があつた。得体も知れない、何かをレイル達は感じた。

「何だか、嫌な予感がする……」

「ちょっと、恐がりだなあレイルつて。そつきのワニの時は勇敢に見えたんだけど、幽霊とかは恐いの？」

「うん、昔司祭様からオバケの話聞かされて、夜眠れなくなつた事があるんだ」

「それで、今でも恐いんだ。へー、子供っぽいなあ。でも、分かつてゐると思うけど、その幽霊に憑りつかれるんだからね、レイルは」

「……」

2人は、部屋を一つずつ見て回る。

それぞれの部屋には、棺桶が横向きに並べられていた。おそらく、中には過去に死んだ者達が眠つているのだろう。しかし、これらの部屋は目的の場所では無い。

ノーリーの地図を再び開く。

構造を照らし合わせると、どうやら田舎の階層には間違いないようだつた。

部屋の一つに、赤い丸がついてある。二二が、悪霊の住まつところなのだろう。

「もう少ししだね！ ちょっと、疲れてきたよ。」

「レイルったら、スタミナ無いわね。」

「やつとき冥術使ったからだよ。結構あの冥術は疲れるんだ。」

「ふーん。まあ、霊があるかもしれないし、ゆっくり行きましょ  
うか。」

休憩を入れながら、進路を辿る。

目的の場所に近づくに連れ、何だかさつきの得体の知れない感覚  
が強くなっているようにレイルは感じた。

そして、その瘴気の様なものが一際強くなつた時、他の部屋とは  
違つ、独特の文様に囲まれた部屋の入口が目の前に現れた。

「二二が……悪霊の住まつ部屋……」

レイルは、緩んでいた氣を引き締め直した。



懸賞の仕まい所（前書き）

ケーナは、目的の部屋を発見した……？

36032 — 36534

「ijiが……ノエリーさんの言つてこた部屋なのかな？」

入口より向こうに蔓延る闇。

レイルは、それに呼ばれているような氣もしたし、拒まれているような氣もした。混沌とした何かがその部屋の内部を取り巻いているのが、よくわかつた。

「ノエリーさんは、ijiの悪霊は靈感が強ければ見る事が出来るつていつてたね」

「うん。でも、本当かなあ？」

レイルは、ノエリーの情報を信頼はしていたが、今回の件に関してもちっと不安だつた。そもそもに、靈感と言つものが自分に備わっているのかがわかつていなかつた。

「入つてみるしかないね。一応、私はそこそこ靈感があるんだ。私の家系は基本的にみんな靈視が出来るらしいし、実際に昔見た事があるからね。幽霊を」

「えつ！ そうなの？ ケーナつて幽霊見たことあるんだ」

「うん、昔お城でね。女人の靈だったな。体は透けてたんだけど、とってもきれいな人だつた。もしかすると私のご先祖サマかもね～あはは！」

ケーナの冗談は微妙だったが、レイルの不安をやわらげる効果はあつた。

そうだ、靈なんてそんなに恐ろしいものではないんだ。少しだがそう思えてきた。

「行こう、ケーナ。危険かもしれないけど、僕はいかなきゃならない。」

「うん！ 任せてよ！ もしもの時は私がレイルを守つてあげるからね！ 神聖系冥術は私もある程度使えるし」

レイルは、ケーナに信頼の眼差しを向ける。

彼女はウインクをすると、手に持つ剣を光らせながら、レイルよ

り先に部屋の内部に侵入した。

「レイル！ いいよ！ 来て！」

「わかった！ 今行くよ！」

ケーナの言葉に従う。レイルは、悪霊渦巻く部屋に足を踏み入れる。

おぞましい何かで、一瞬寒気を感じた。

そこは確かに、王家の墓の禁じられた部屋「不昇の間」であった。

適靈探し（前書き）

2人が入った「不昇の間」の中は……

「わつ！」

入った瞬間にレイルは声を上げた。

その部屋の中には半透明の人間の姿をした靈達がゆらゆら蠢いていたからだ。

彼らは、皆青白い顔をしていて目はつぶつだった。2人に、気付く様子も無い。

「随分、元氣の無い悪靈たちだね。」

ケーナは、少し拍子抜けしていた。もっと、ワーッと襲ってくると思っていたからだ。

しかし、銀製の剣は念のため構えていた。

「レイル、いよいよだね……この中から女人の人の靈を探すよ。」

「うん、でも、この人たち本当に悪靈なのかな？」

「ノエリーが言つてゐるんだしそうだと思つよ。まあ、信じるしかないって。」

「そうだね。じゃあ、見てみようか。」

レイルは、「テリア」で照らされた靈達を眺める。  
なるほど、靈に元気が無いのは、ひょっとするどこの光のせいかもしれない。

しかし、強い惡靈はこんなことで弱つたりするだらうか？

レイルの考えた理論の信憑性は微妙であった。

靈達は、男性と老人が多い。みんな結構豪華な服を身につけている。

子供の靈は、いなかつた。惡靈になる事は少ないのだろう。

そんな中、ふと、ケーナはある靈に田が行った。

他の例とは違つて、やらめかずに部屋の隅っこに座つている。  
年は……二十代後半だろうか？ 長い髪と大きな胸を持つそれは、  
女性のようだつた。

「見つけた！ レイル！ 見つけたよ！」

「ホントに？」

「あそこにあるよ！ 行つてみよう！」

2人は、その靈のところに向う。  
他の靈達はただそれを傍観しているだけだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0853v/>

---

砂塵りのケーナ

2011年11月29日20時57分発行